に立つものはそれ丈に苦勞が多く、里方が此樣な身柄では猶更のこと人に侮られぬやうの心懸けもしなければ成るまじ、それを種々に思ふて見ると父さんだとて私だとて孫なり子なりの顏の見たいは當然なれど、餘りうるさく出入りをしてはと控へられて、ほんに御門の前を通る事はありとも木綿着物に毛繻子の洋傘さした時には見す〳〵お二階の簾を見ながら、あゝお關は何をして居る事かと思ひやるばかり行過ぎて仕舞ふまする、實家でも少し何とか成つて居たならばお前の肩身も廣からうし、同じくでも少しは息のつけやうものを、何を云ふにも此通り、お月見の團子をあげやうにもお重箱からしてお恥かしいでは無からうか、ほんにお前の心遣ひが思はれると嬉しき中にも思ふまゝの通路が叶はねば、愚痴の一つかみ賤しき身分を情なげに言はれて、本當に私は親不孝だと思ひまする、それは成程柔かい衣服きて手車に乘りあるく時は立派らしくも見えませうけれど、父さんや母さんに斯うして上やうと思ふ事も出來ず、いはゝ自分の皮一重、寧賃仕事してもお傍で暮した方がよつぽど快よう御座いますと言ひ出すに、馬鹿、馬鹿、其樣な事を假にも言ふてはならぬ、嫁に行つた身が實家の親の貢をするなどゝ思ひも寄らぬ事、家に居る時は齋藤の娘、嫁入つては原田の奧方ではないか、勇さんの氣に入るやうにして家の內を修めてさへ行けば何の仔細は無い、骨が折れるからとてそれ丈の運のある身ならば堪へられぬ事は無い筈、女などゝいふ者は何うも愚痴で、お袋などが詰らぬ事を言ひ出すから困り切る、いや何うも團子を喰べさせる事が出來ぬとて一日大立腹であつた、大分熱心で調ふたものと見えるから十分に喰べて安心させて遣つて呉れ、餘程甘からうぞと父親の戲謔を入れるに、再び言ひそびれて御馳走の栗枝豆ありがたく頂戴しぬ。

嫁入りてより七年の間、いまだに夜に入りて客に來しこともなく、土產もなしに一人歩きして來るなど悉皆ためしのなき事なるに、思ひなしか衣類も例ほどきらびやかならず、稀に逢ひたる嬉しさにさのみは心に附かざりしが、鞆よりの言傳とて何一言の口上もなく、無理に笑顏は作りながら底に萎れし處のあるは何か仔細のなくては叶はず、父親は机の上の置時計を眺めて、こりやもう程なく十時になるが關は泊つて行つて宜いのかの、歸るならばもう歸らねばなるまいぞと氣を引いて見る親の顏、娘は今更のやうに見上げて御父樣私は御願があつて出たので御座ります、何うぞ御聞遊ばしてと屹となつて疊に手を突く時、はじめて一まづく幾層の憂きを洩らしそめぬ。

父は穩かならぬ色を動かして、改まつて何かのと膝を進めれば、私は今宵限り原田へ歸らぬ決心で出て參つたので御座ります、勇が許しで參つたのではなく、あの子を寐かして、太郎を寐

に立つものはそれ丈に苦勞が多く、里方が此樣な身柄では猶更のこと人に侮られぬやうの心懸けもしなければ成るまじ、そを種々に思ふて見ると父さんだとて私だとて孫なり子なりの顏の見たいは當然なれど、餘りうるさく出入りをしてはと控へられて、ほんに御門の前を通る事はありとも木綿着物に毛繻子の洋傘さした時には見す〳〵お二階の簾を見ながら、あゝお關は何をして居る事かと思ひやるばかり行過ぎて仕舞ふまする、實家でも少し何とか成つて居たならばお前の肩身も廣からうし、同じくでも少しは息のつけやうものを、何を云ふにも此通り、お月見の團子をあげやうにもお重箱からしてお恥かしいでは無からうか、ほんにお前の心遣ひが思はれると嬉しき中にも思ふまゝの通路が叶はねば、愚痴の一つかみ賤しき身分を情なげに言はれて、本當に私は親不孝だと思ひまする、それは成程柔かい衣服きて手車に乘りあるく時は立派らしくも見えませうけれど、父さんや母さんに斯うして上やうと思ふ事も出來ず、いはゞ自分の皮一重、寧賃仕事してもお傍で暮した方がよつぽど快よう御座いますと言ひ出すに、馬鹿、馬鹿、其樣な事を假にも言ふてはならぬ、嫁に行つた身が實家の親の貢をするなどゝ思ひも寄らぬ事、家に居る時は齋藤の娘、嫁入つては原田の奥方ではないか、勇さんの氣に入るやうにして家の内を修めてさへ行けば何の仔細は無い、骨が折れるからとてそれ丈の運のある身

ならば堪へられぬ事は無い筈、女などゝいふ者は何うも愚痴で、お袋などが詰らぬ事を言ひ出すから困り切る、いや何うも團子を喰べさせる事が出來ぬとて一日大立腹であつた、大分熱心で調ふたものと見えるから十分に喰べて安心させて遣つて呉れ、餘程甘からうそと父親の戯謔を入れるに、再び言ひそびれて御馳走の栗枝豆ありがたく頂戴しぬ。

嫁入りてより七年の間、いまだに夜に入りて客に來しこともなく、土産もなしに一人歩きして來るなど悪皆ためしのなき事なるに、思ひなしか衣類も例はどきらびやかならず、稀に逢ひたる嬉しさにさのみは心も附かざりしが、鞆よりの言傳とて何一言の口上もなく、無理に笑顏は作りながら底に萎れし處のあるは何か仔細のなくては叶はず、父親は机の上の置時計を眺めて、こりやもう程なく十時になるが關は泊つて行つて宜いのかの、歸るならばもう歸らねばなるまいぞと氣を引いて見る親の顏、娘は今更のやうに見上げて御父樣私は御願があつて出たので御座ります、何うぞ御聞遊ばしてと屹となつて膝に手を突く時、はじめて一ぢつく幾層の憂きを洩らしそめぬ。

父は穩かならぬ色を動かして、改まつて何かのと膝を進めれば、私は今宵限り原田へ歸らぬ決心で出て參つたので御座ります、勇が許しで參つたのではなく、あの子を捨かして、太郎を捨

かしつけて、もうあの顔を見ぬ決心で出て參りました、まだ私の手より外誰れの守りでも承知せぬほどの彼の子を、欺して寐かして夢の中に、私は鬼に成つて出て參りました、御父樣、御母樣、察して下さりませ私は今日までつひに原田の身に就いて御耳に入れました事もなく、勇と私との中を人に言ふた事は御座りませぬけれど、千度も百度も考へ直して、二年も三年も泣盡して今日といふ今日どうでも離縁を貰ふて頂かうと決心の臍をかためました、何うぞお願ひで御座ります離縁の狀を取つて下され、私はこれから內職なり何なりして亥之助が片腕にもなられるやう心がけますほどに、一生一人で置いて下さりませとわつと聲たてるを嚙しめる襦袢の袖、墨繪の竹も紫竹の色にや出づると憐れなり。

それは何ういふ仔細でと父も母も詰寄つて問かゝるに今までは默つて居ましたれど私の家の夫婦さし向ひを半日見て下さつたら大抵がお解りに成ませう、物言ふは用事のある時慳貪に申附けられるばかり、朝起まして機嫌をきけば不圖脇を向いて庭の草花を態とらしき褒め詞、是れにも腹はたてども良人の遊ばす事なればと我慢して私は何も言葉あらそひした事も御座んせぬけれど、朝飯あがる時から小言は絶えず、召使の前にて散々と私が身の不器用不作法を御並べなされ、それはまだ〳〵辛防もしませうけれど、二言目には教育のない身、教育のない身と御蔑

みなさる、それは素より華族女學校の椅子にかゝつて育つた者ではないに相違なく、御同僚の奥樣がたのやうにお花のお茶の、歌の謠のと習ひ立てた事もなければ其お話しのお相手は出來ませぬけれど、出來ずば人知れず習はせて下さつても濟むべき筈、何も表向き實家の悪いを吹聽なされて、召使ひの婢女どもに顏の見られるやうな事なさらずとも宜かりさうなもの、嫁入つて丁度半年ばかりの間は關や關やと下へも置かぬやうにして下さつたけれど、あの子が出來てからといふものは丸で御人が變りまして、思ひ出しても恐ろしう御座ります、私はくら闇の谷へ突落されたやうに暖かい日の影といふを見た事が御座りませぬ、はじめの中は何か申感に態とらしく邪慳に遊ばすのと思ふて居りましたけれど、全くは私にお厭きなされたので此樣もしたら出てゆくか、彼樣もしたら離縁をと言ひ出すかと苛めて苛めて責め拔くので御座りましよ、御父樣も御母樣も私の性分は御存じ、よしや良人が惡者狂ひなさらうとも、圍ひ者してお置きなさらうとも其樣な事に悋氣する私でも立く　婢女どもから其樣な噂も聞えぬするけれどあれほど働きのある御方なり、男の身のそれ位はありうちと他處行には衣類にも氣をつけて氣に逆らはぬやう心がけて居りまするに、唯もう私の爲る事とては一から十まで面白くなく思召し、箸の上げ下しに家の內の樂しくないは妻が仕方の悪いからだと仰しやる、それも何ういふ

事が悪い、此處が面白くないと言ひ聞かして下さるやうならば宜けれど、一筋に詰らぬくだらぬ、解らぬ奴、とても相談の相手にはならぬの、いはゞ太郎の乳母として置いて遣はすのと嘲つて仰しやるばかり、ほんに良人といふではなくあの御方は鬼で御座りまする、御自分の口から出てゆけとは仰しやりませぬけれど私が此樣な意氣地なしで太郎の可愛さに氣が引かれ、何うでもお詞に違背せず唯々と御小言を聞いて居りますれば、張も意氣地もない愚うたらの奴、それからして氣に入らぬと仰しやりまする、左樣かと言つて少しなりとも私の言條を立てゝ貰けぬ氣にお返事をしましたらそれを取つこに出てゆけと言はれるは必定、私は御母樣出て來るのは何でも御座んせぬ、名のみ立派の原田勇に離縁されたからとてゆめさら殘りをしいとは思ひませぬけれど、何にも知らぬ彼の太郎が、一片親に成るかと思ひまするとて口惜しさ悲しさ打出し、思ひも寄らぬ事を語れば く、詫て機嫌を取つて、何でも無い事に恐れ入つて、今日までも物言はず辛防して居りました、御父樣、御母樣、私は不運で御座りますと思ひも寄らぬ事を語れば兩親は顔を見合せて、さては其樣の憂き中かと呆れて暫時いふ言もなし。

母親は子に甘きならひ、聞く毎々に身にしみて口惜しく、父樣は何と思召すか知らぬが元來此方から貰ふて下されと願ふて遣つた子ではなし、身分が悪いの學校が何うしたのとよくも〳〵

勝手な事が言はれたもの、先方は忘れたかも知らぬが此方はたしかに日まで覺えて居る、阿關が十七の御正月、まだ門松を取もせぬ七日の朝の事であつた、もとの猿樂町の彼の家の前でお隣の小娘と追羽根して、あの娘の突いた白い羽根が通り掛つた原田さんの車の中へ落たとつて、それをば阿關が貰ひに行きしに、其時はじめて見たとか言つて人橋かけてやい〳〵と貰ひたがる、御身分がらにも釣合ひませぬし、此方はまだ根つからの子供で何も稽古事も仕込んでは置ませず、支度とても只今の有樣で御座いますからとて幾度斷つたか知れはせぬけれど、何も眞姑のやかましいが有るではなし、我が欲しくて我が貰ふに身分も何も言ふ事はない、稽古は引取つてからでも十分させられるから其心配も要らぬ事、兎角くれさへすれば大事にして置かうからとそれは〳〵火のつくやうに催促して、此方から强請た譯ではなけれど支度まで先方で調へて謂はゞお前は戀女房、私や父樣が遠慮してさのみは出入りをせぬといふも勇さんの身分を恐れてゞはない、これが妾手かけに出したのではなし正當にも正當にも百まんだら頼みによして貰つて行つた嫁の親、大威張に出這入しても差つかへは無けれど、彼方が立派にやつて居るに、此方が此通りつまらぬ活計をして居れば、お前の縁にすがつて親の助力を受けもするかと他人樣の所思が口惜しく、痩せ我慢では無けれど交際だけは御身分相應に盛して、平生は

逢ひたい娘の顔も見ずに居まする、それをば何の馬鹿々々しい親なし子でも拾つて行つたやうに大層らしい、物が出來るの出來ぬのとよく其樣な口が利けたもの、默つて居ては際限もなく募つてそれは〳〵癖に成つて仕舞ひます、第一は婢女どもの手前與樣の威光が殺げて、末には お前の言ふ事を聞く者もなく、太郎を仕立るにも母樣を馬鹿にする氣になられたら何とします る、言ふだけの事は屹度言ふて、それが悪いと小言をいふたら何の私にも家がありますとて出て來るが宜かろうではないか、ほんに馬鹿々々しいとつては失れほどの事を今日が日まで默つて居るといふ事がありますものか、あんまり お前が温順し過ぎるから我儘がつのられたのであろ、聞いたばかりでも腹が立つ、もう〳〵怯けて居るには及びません、身分が何であらうが父もある母もある、年はゆかねど亥之助といふ弟もあれば其樣な火の中にじつとして居るには及ばぬこと、なあ父樣一遍勇さんに逢ふて十分油を取つたら宜う御座りましよと母は猛つて前後もかへり見ず。

父親は先刻より腕ぐみして目を閉ぢてありけるが、あゝお袋、無茶の事を言ふてはならぬ、我さへ初めて聞いて何うしたものかと思案にくれる、阿關の事なれば並大抵で此樣な事を言ひ出しさうにもなく、よく〳〵つらさに出て來たと見えるが、して今夜は錐どのは不在か、何か改ま

つての事件でもあつてか、いよ〳〵離縁するとでも言はれて來たのかと落ついて問ふに、其人は一昨日より家へとては歸られませぬ、五日六日と家を明けるは常の事、さのみ珍らしいとは思ひませぬけれど出際に召物の揃へかたが悪いとて如何ほど詫びても聞入れがなく、其品をば脱いで擲きつけて、御自身洋服にめしかへて、あゝ、私位不仕合の人間はあるまい、お前のやうな妻を持つたのはと言ひ捨てに出て御出で遊ばしました、何といふ事で御座りませう一年三百六十五日物いふ事も無く、たま〳〵言はるれば此樣な情ない詞をかけられて、それでも原田の妻と言はれたいか、太郎の母で候と顔おし拭つて居る心か、我身ながら我身の辛防がわかりませぬ、もう〳〵もう私は其人も子も御座んせぬ嫁入せぬ昔と思へばそれまで、あの頑是ない太郎の寝顔を眺めながら置いて來るほどの心になりましたからは、もう何うでも勇の側に居る事は出來ませぬ、親はなくとも子は育つと言ひまするし、私のやうな不運の母の手で育つより繼母御なり御手かけなり氣に適ふた人に育てゝ貰ふたら、少しは父御も可愛がつて後々あの子の爲にも成ませう、私はもう今宵かぎり何うしても歸る事は致しませぬとて、斷つても斷てぬ子の可愛さに、奇麗に言へども詞はふるへぬ。

父は歎息して、無理は無い、居辛くもあらう、困つた中に成つたものよと暫時阿關の顔を眺め

しが、大丸髷に金輪の根を卷きて黒縮緬の羽織何の惜しげもなく、我が娘ながらもいつしか整ふ奥樣風、これをば結び髪に結ひかへさせて綿鉛仙の半纏に襷がけの水仕業さする事いかにして忍ばるべき、太郎といふ子もあるものなり、一旦の怒りに百年の運を取はづして、人には笑はれものとなり、身はいにしへの齋藤主計が娘に戻らば、泣くとも笑ふとも再び原田太郎が母とは呼ばるゝこと成るべきにもあらず、良人に未練は殘さずとも我が子の愛の斷ちがたくは離れていよ〳〵物をも思ふべく、今の苦勞を戀しがる心も出づべし、斯く容よく生れたる身の不幸、不相應の緣につながれて幾らの苦勞をさする事と憐れさの增れども、いや阿關斯う言ふと父が無慈悲で酌取つて呉れぬのと思ふか知らぬが決してお前を叱るではない、身分が釣合はねば思ふ事も自然違ふて、此方は眞から盡す氣でも取りやうに由つては而白くなく見える事もあらう、勇さんだからとてあの通り物の道理を心得た、利發の人ではあり隨分學者でもある、無茶苦茶にいちめ立る譯ではあるまいが、得て世間に褒め物の敏腕家などゝ言はれるは極めて恐ろしい我まゝ者、外では知らぬ顏に切つて廻せど勤め向きの不平などまで家内へ歸つて當りちらされる、的に成つては隨分つらい事もあらう、なれどもあれほどの良人を持つ身のつとめ、區役所がよひの腰辨當が釜の下を焚きつけて呉れるのとは格が違ふ、隨つてやかましくもあらうむづかしくもあらうそれを機嫌の好いやうにとゝのへて行くが妻の役、表面には見えねど世間の奥樣といふ人達の何れも面白くをかしき中ばかりは有るまじ、身一つと思へば恨みも出る、何のこれが世の勤めなり、殊にはこれほど身からの相違もある事なれば人一倍の苦もある道理、お袋などが口廣い事は言へど亥之が昨今の月給に有ついたも畢竟は原田さんの口入れではなからうか、七光どころか十光もしてよそながらの恩を着ぬとは言はれぬに辛からうとも一つは親の爲弟の爲、太郎といふ子もあるものを今日までの辛防がなるほどならば、これから後とて出來ぬ事はあるまじ、離緣を取つて出たが宜いか、太郎は原田のもの、其方は齋藤の娘、一度緣が切れては二度と顏見にゆく事もなるまじ、同じく不運に泣くほどならば原田の妻で大泣きに泣け、なあ關さうでは無いか、合點がいつたら何事も胸に歛めて知らぬ顏に今夜は歸つて、今まで通りつゝしんで世を送つて呉れ、お前が口に出さんとても親も察しる弟も察しる、涙は各自に分けて泣かうぞと因果を含めてこれも目を拭ふに、阿關はわつと泣いてそれでは離緣をといふたも我儘で御座りました、成程太郎に別れて顏も見られぬやうにならば此世に居たとて甲斐もないものを、唯目の前の苦をのがれたとて何うなるもので御座んせう、ほんに私さへ死んだ氣にならば三方四方波風たゝず、兎もあれ彼の子も兩親の手で育てられまするに、

つまらぬ事を思ひ寄まして、貴君にまで厭な事をお聞かせ申しました、今宵除り關はなくなつて魂一つがあの子の身を守るのと思ひますれば瓦人のつらく當る位百年も辛防出來さうな事、よく御言葉も合點が行きました、もう此樣な事は御聞かせ申しませぬほどに心配をして下さりますなとて拭ふあとから又涙、母親は慶たてゝ何といふ此娘は不仕合と又一しきり大泣きの雨、くもらぬ月も折から淋しくて、うしろの土手の自然生を弟の亥之が折て來て、瓶にさした薄の穂の招く手振りもあはれなる夜なり。

實家は上野の新坂下、駿河臺への路なれば茂れる森の木の下闇わびしけれど、今宵は月もさやかなり、廣小路へ出づれば晝も同樣、雇ひつけの車宿とて無き家なれば路ゆく車を窓から呼んで、合點が行つたら兎も角も歸れ、主人の留守に斷りなしの外出、これを咎められるとも申譯の詞は有るまじ、少し時刻は遲れたれど車ならばつひ一飛、話は重ねて聞きに行かう、先づ今夜は歸つて呉れとて手を取つて引出すやうなるも事あら立てじの親の慈悲、阿關はこれまでの身と覺悟してお父樣、お母樣、今夜の事はこれ限り、歸りまするからは私は原田の妻なり、瓦人を誹るは濟みませぬほどにもう何も言ひませぬ、關は立派な瓦人を持つたので弟の爲にも好い片腕、あゝ安心なと喜んで居て下されば私は何も思ふ事は御座んせぬ、決して決して不料

簡など出すやうな事はしませぬほどにそれも案じて下さりますな、私の身體は今夜をはじめに勇のものだと思ひまして、彼の人の思ふまゝに何となりして貰ひましよ、それではもう私は戻ります、亥之さんが歸つたらば宜しくいふて置いて下され、お父樣もお母樣も御機嫌よう、此次には笑ふて參りまするとて是非なさゝうに立あがれば、母親は無けなしの巾着さげて出て駿河臺まで幾干でゆくと門なる車夫に聲をかくるを、あ、お母樣それは私がやりまする、難有う御座んしたと温順しく挨拶して、格子戸くゞれば顏に袖、涙をかくして乘り移る憐れさ、家には父が咳拂ひの是れもうるめる聲なりし。

(下)

さやけき月に風のおと添ひて、虫の音たえ〳〵に物かなしき上野へ入りてよりまだ一町もやう〳〵と思ふに、いかにしたるか車夫はぴつたりと轅を止めて、誠に申かねましたが私はこれで御免を願ひます、代は入りませぬからお下りなすつてと突然にいはれて、思ひもかけぬ事なれば阿關は胸をどつきりとさせて、あれお前そんな事を言つては困るではないか、少し急ぎの事でもあり增しは上げやうほどに骨を折つてお呉れ、こんな淋しい處では代りの車も有るまいで

はないか、それはお前人困らせといふもの、ぐずらずに行つてお呉れと少しふるへて頼むやうに言へば、増しが欲しいといふのではありませぬ、私からお願ひです何うぞお下りなすつて、もう引くのが厭になつたので御座りますと言ふに、それではお前加減でも悪いか、まあ何うしたといふ譯、此處まで挽いて來て厭になつたでは濟むまいがねと聲に力を入れて車夫を叱れば、御免なさいまし、もう何うでも厭になつたのですからとて提燈を持しまゝ不圖脇へのがれて、お前は我まゝの車夫さんだね、それならば約定の處までとは言ひませぬ、代りのある處まで行つて呉れゝばそれでよし、代はやるほどに何處か其邊まで、せめて廣小路までは行つてお呉れと優しい聲にすかすやうにいへば、成るほど若いお方ではあり此淋しい處へおろされては定めしお困りなさりませう、これは私が悪う御座りました、ではお乘せ申しませう、お供を致しませう、嘸お驚きなさりましたらうとて悪漢らしくもなく提燈を持かふるに、お關もはじめて胸をなで、心丈夫に車夫の顔を見れば二十五六の色黑く、小男の痩せぎす、あ、月に背けたあの顔が誰れやらで有つた、誰れやらに似て居ると人の名も咽元まで轉がりながら、もしやお前さんはと我知らず聲をかけるに、え、と驚いて振あふぐ男、あれお前さんはあのお方ではないか、私をよもやお忘れはなさるまいと車より滑るやうに下りてつく〳〵と打まもれば、貴孃は齋藤

の阿關さん、面目も無い此樣な姿で、背後に目が無ければ何の氣もつかずに居ました、それでも音聲にも心づくべき筈なるに、私は餘程の鈍に成りましたと下を向いて身を恥れば、阿關は頭の先より爪先まで眺めていえ〳〵私だとて往來で行違ふた位ではよもや貴君と氣は附きますまい、唯た今の先までも知らぬ他人の車夫さんとのみ思ふて居ましたに御存じないは當然、勿體ない事であつたれど知らぬ事なればゆるして下され、まあ何時から此樣な業して、よく其屠弱い身に障りもしませぬか、伯母さんが田舍へ引取られてお出なされて、小川町のお店をお廢めなされたといふ噂は他處ながら聞いても居ましたれど、私も昔の身でなければ種々と障る事があつてね、お尋ね申すは更なること手紙あげる事も成ませんかつた、今は何處に家を持つて、お内儀さんも御健勝か、小兒のも出來てか、今も私は折ふし小川町の勸工場見に行まする度毎、舊のお店がそつくり其儘同じ烟草店の能登やといふに成つて居まするを、何時通つても覗かれて、あゝ高坂の錄さんが子供であつたころ、學校の往復りに寄つては卷烟草のこぼれを貰ふて、生意氣らしう吸立てたものなれど、今は何處に何をして、氣の優しい方なれば此樣なむづかしい世に何のやうの世渡りをしてお出なさらうか、それも心に懸りまして、實家へ行く度に御樣子を、もし知つても居るかと聞いては見まするけれど、猿樂町を離れたのは今で五年の前、根

つからお便りを聞く縁がなく、何んなにおなつかしう御座んしたらうと我身のほどをも忘れて問ひかくれば、男は流れる汗を手拭にぬぐふて、お恥かしい身に落ぶれまして今は家といふものも御座りませぬ、寢處は淺草町の安宿、村田といふが二階に轉がつて、氣に向いた時は今夜のやうに遲くまで挽く事もありまするし、厭と思へば日がな一日ごろ〳〵として烟のやうに暮して居まする、貴孃は相變らずの美くしさ、奥樣にお成りなされたと聞いた時からそれでも一度は拜む事が出來るか、一生の内に又お言葉を交はす事が出來るかと夢のやうに願ふて居ました、今日までは入用のない命と捨て物に取りあつかふて居ましたけれど命があればこその御對面、あゝ能く私を高坂の錄之助と覺えて居て下さりました、辱なう御座りますと下を向くに、阿闍はさめ〳〵として離れも愛さ世に一人と思ふて下さるな。

走てお内儀さんはと阿闍の問へば、御存じで御座りましよ筋向ふの杉田やが娘、色が白いとか恰好が何うだとか言ふて世間の人は喧雲に褒めたてた女で御座ります、私が如何にも放蕩をつくして家へとては寄りつかぬやうに成つたを、貰ふべき頃に貰ふ物を貰はぬからだと親類の中のわからずやが勘違ひして、あれならばと母親が眼鏡にかけ、是非もらへ、やれ貰へと無茶苦茶に勸めたてる五月蠅さ、何うなりと成れ、成れ、勝手に成れとて彼れを家へ迎へたは丁度貴孃が御懷妊だと聞ました時分の事、一年目には私が處にもお目出たうを他人からは言はれて、犬張子や風車を並べたてるやうに成りましたれど、何のそんな事で私が放蕩のやむ事か、人は顔の好い女房を持たせたら足が止まるか、子が生れたら氣が改まるかとも思ふて居たのであらうなれど、たとひ小町と西施と手を引いて來て、衣通姫が舞を舞つて見せて呉れても私の放蕩は直らぬ事に極めて置いたを、何で乳くさい子供の顔見て發心が出來ませう、遊んで遊んで遊び拔いて、呑んで呑んで呑み盡して、家も稼業もそつち除けに箸一本もたぬやうに成つたは一昨々年、お袋は田舍へ嫁入つた姉の處に引取つて貰ひまするし、女房は子をつけて實家へ戻したまゝ音信不通、女の子ではあり惜しいとも何とも思ひはしませぬけれど、其子も昨年の暮窒扶斯に罹つて死んださうに聞ました、女はませた者ではあり、死ぬ際には定めし父樣とか何とか言ふたので御座りませう、今年居れば五つになるので御座りました、何のつまらぬ身の上、お話しにも成りませぬ。

男はうす淋しき顔に笑みを浮べて貴孃といふ事も知りませぬので、飛んだ我まゝの不調法、さ、お乘りなされ、お供をしまする、嘸不意でお驚きなさりましたらう、車を挽くと言ふも名ばかり、何が樂しみに孃棒をにぎつて、何が望みに牛馬の眞似をする、錢が貰へたら嬉しいか、酒

が呑まれたら愉快なか、考へれば何も彼も悉皆厭で、お客樣を乘せやうが空車の時だらうが厭となると用捨なく厭に成まする、呆れはてる我まゝ男、愛想が盡きるでは有りませぬかい、さ、お乘りなされ、お供をしますとすゝめられて、あれ知らぬ中は仕方もなし、知つて其車に乘れますものか、それでも此樣な淋しい處を一人ゆくは心細いほどに、廣小路へ出るまで唯道づれに成つて下され、話しながら行きませうとて阿關は小褄少し引あげて、ぬり下駄のおと是れも淋しげなり。

昔の友といふ中にもこれは忘られぬ由緣のある人、小川町の高坂とて小奇麗な烟草屋の一人息子、今は此樣に色も黑く見られぬ男になつては居れども、世にある頃の唐棧ぞろひに小氣の利いた前だれがけ、お世辭も上手、愛敬もありて、年の行かぬやうにも無い、父親の居た時よりは却つて店が賑やかなと評判された利口らしい人の、さても〳〵の變り樣、我身が嫁入りの噂聞え初た頃から、やけ遊びの底ぬけ騷ぎ、高坂の息子は丸で人間が變つたやうな、魔でもさしたか、祟りでもあるか、よもや只事では無いと其頃に聞きしが、今宵見れば如何にも淺ましい身の有樣、木賃泊りに居なさんすやうに成らうとは思ひも寄らぬ、私は此人に思はれて、十二の年より十七まで明暮れ顏を合せる毎に行々は彼の店の彼處へ坐つて、新聞見ながら商ひするのと思ふても居たれど、はからぬ人に緣の定まりて、親々の言ふ事なれば何の異存を入れられやう、烟草屋の錄さんにとは思へどそれはほんの子供心、先方からも口へ出して言ふた事はなし、此方は猶さら、これは取とまらぬ夢のやうな戀なるを、思ひ切つて仕舞へ、思ひ切つて仕舞へ、あきらめて仕舞はうと心を定めて、今の原田へ嫁入りの事には成つたれど、其際迄も涙がこぼれて忘れかねた人、私が思ふほどは此人も思ふて、それ故の身の破滅かも知れぬものを、我が此樣な丸髷などに、取すましたるやうな姿をいかばかり面憎く思はれるであらう、ゆめさら左樣した樂しらしい身ではなけれども阿關は振返つて錄之助を見やるに、何を思ふか茫然とせし顏つき、時たま逢ひし阿關に向つてさのみは嬉しき樣子も見えざりき。

廣小路に出づれば車もあり、阿關は紙入れより紙幣いくらか取出して小菊の紙にまぶらしく包みて、錄さんこれは賊に失禮なれど奠紙なりとも買つて下され、久し振でお目にかゝつて何か申たい事は澤山あるやうなれど口へ出ませぬは察して下され、では私はお別れに致します、隨分からだを厭ふて煩らはぬやうに、伯母さんをも早く安心させておあげなさりまし、蔭ながら私も祈ります、何うぞ以前の錄さんにお成りなされて、お立派にお店をお開きに成ります處を見せて下され、左樣ならばと挨拶すれば錄之助は紙づゝみを頂いて、お辭儀申す筈なれど貴嬢

のお手より下されたのなれば、難有く頂戴して思ひ出にしまする、お別れ申すが惜しいと言ひても是れが夢ならば仕方のない事、さ、お出なされ、私も歸ります、更けては路が淋しう御座りますぞとて空車引いてうしろ向く、其人は東へ、此人は南へ、大路の柳月のかげに靡いて力なさゝうの塗り下駄の音、村田の二階も原田の興も愛きはお互ひの世におもふ事多し。

わかれ道

(上)

お京さん居ますかと窓の戸の外に來て、こと〳〵と羽目を敲く音のするに、誰れだえ、もう寐て仕舞つたから明日來てお呉れと嘘を言へば、寐たつて宜いやね、起きて明けてお呉んなさい、傘屋の吉だよ、己れだよと少し高く言へば、いやな子だね此樣な遲くに何を言ひに來たか、又お餅のおねだりか、と笑つて、今あけるよ少時辛防おしと言ひながら、仕立かけの縫物に針どめして立つは年頃二十餘りの意氣な女、多い髪の毛を忙しい折からとて結び髪にして、少し長めな八丈の前だれ、お召の臺なしな半天を着て、急ぎ足に沓脫へ下りて格子戸に添ひし雨戸を明くれば、お氣の毒さまと言ひながらずつと這入るは一寸法師と仇名のある町内の暴れ者、傘屋の吉とて持て餘しの小僧なり、年は十六なれども不圖見る處は一か二か、肩幅せばく顔小さく、目鼻だちはきり〳〵と利口らしけれどいかにも脊の矮ければ人嘲りて仇名はつけゝる。徊兇なさい、と火鉢の傍へづか〳〵と行けば、お餅を燒くには火が足らないよ、臺所の火消壺か

ら消し炭を持つて來てお前が膝手に燒いてお喰べ、私は今夜中に此れ一枚を上げねばならぬ、角の質屋の旦那どのが御年始着だからとて針を取れば、吉はふゝんと言つて彼の兀頭には惜しい物だ、御初穂を己れでも着て遣らうかと言へば、馬鹿をお言ひでない人のお初穂を着ると出世が出來ないと言ふではないか、今つから伸びる事が出來なくては仕方が無い、其樣な事を他處の家でもしては不可よと氣を附けるに、己れなんぞ御出世は願はないのだから他人の物だらうが何だらうが着かぶつて遣るだけが徳さ、お前さん何時か左樣言つたね、運が向く時になると己れに糸織の着物をこしらへて呉れるつて、本當に調製へて呉れるかえと眞面目だつて言へば、それは調製へて上げられるやうならお目出度のだもの喜んで調製へるがね、私が姿を見てお呉れ、此樣な容躰で人さまの仕事をして居る境界ではなからうか、まあ夢のやうな約束さとて笑つて居れば、いゝやなそれは、出來ない時に調製へて呉れとは言はない、お前さんに運の向いた時の事さ、まあ其樣な約束でもして喜ばして置いてお呉れ、此樣な野郎が糸織ぞろへを被つた處がをかしくも無いけれどもと淋しさうな笑顔をすれば、そんなら吉ちやんお前が出世の時は私にもしてお呉れか、其約束も極めて置きたいねと微笑んで言へば、其奴はいけない、己れは何うしても出世なんぞは爲ないのだから。何故々々。何故でもしない、誰れが來て無理

やりに手を取つて引上げても己れは此處に斯うして居るのがいゝのだ、傘屋の油引きが一番好いのだ、何うで盲目縞の筒袖に三尺を脊負つて產て來たのだらうから、澁を買ひに行く時かすりでも取つて吹矢の一本も當りを取るのが好い運さ、お前さんなぞは以前が立派な人だといふから今に上等の運が馬車に乘つて迎ひに來やすのさ、だけれどもお妾になるといふ謎では無いぜ、惡く取つて怒つてお呉んなさるな、と火なぶりをしながら身の上を歎くに、左樣さ馬車の代りに火の車でも來るであらう、隨分胸の燃える事があるからね、とお京は尺を杖に振返りて吉三が顏を諦視りぬ。

例の如く竈所から炭を持出して、お前は喰ひなさらないかと聞けば、いゝえ、とお京の頭をふるに、では己ればかり御馳走さまにならうかな、本當に自家の吝嗇奴めやかましい小言ばかり言やがつて、人を使ふ法をも知りやがらない、死んだお老婆さんはあんなのでは無かつたけれど、今度の奴等と來たら一人として話せるのは無い、お京さんお前は自家の半次さんを好きか、隨分厭味に出來あがつて、いゝ氣の骨頂の奴ではないか、己れは親方の息子だけれど彼奴ばかりは何うしても主人とは思はれない、番ごと喧嘩をして遣り込めてやるのだが隨分おもしろいよと話しながら、鐵網の上へ餅をのせて、おゝ熱々と指先を吹いてかゝりぬ。

己れは何うもお前さんの事が他人のやうに思はれぬは何ういふものであらう、お京さんお前は弟といふを持つた事は無いのかと問はれて、私は一人子で同胞なしだから弟にも妹にも持つた事は一度も無いと言ふ、左樣かなあ、それでは矢張何でも無いのだらう、何處からか斯うお前のやうな人が己れの眞身の姉さんだとか言つて出て來たら何んなに嬉しいか、首つ玉へ嚙り着いて己れはそれぎり往生しても惜ぶのだが、本當に己れは木の股からでも出て來たのか、つひしか親類らしい者に逢つた事も無い、それだから幾度も幾度も考へては己れはもう一生誰れにも逢ふ事が出來ない位なら今のうち死んで仕舞つた方が氣樂だと考へるがね、それでも慾があるから可笑しい、ひよつくり變てこな夢なんかを見てね、平常優しい事の一言も言つて呉れる人が母親や親父や姉さんや兄さんのやうに思はれて、もう少し生きて居やうかしら、もう一年も生きて居たら誰れか本當の事を話して呉れるかと樂しんでね、面白くも無い油引きをやつて居るが己れ見たやうな變な物が世間にも有るだらうかねえ、お京さん母親も親父も空つきり當が無いのだよ、親なしで產れて來る子があらうか、己れは何うしても不思議でならない、と燒あがりし餅を兩手でたゝきつゝいつも言ふなる心細さを繰返せば、それでもお前從づる錦の守り袋といふやうな證據は無いのかえ、何か手懸りは有りさうなものだねとお京の言ふを消し

て、何其樣な氣の利いた物は有りさうにもしない生れると直さま橋の袂の貸赤子に出されたのだなどゝ朋輩の奴等が悪口をいふが、もしかもすると左樣かも知れない、それなら己れは乞食の子だ、母親も親父も乞食かも知れない、表を通る襤褸を下げた奴が矢張己れが親類まきで毎朝きまつて貰ひに來る跛隻眼のあの婆あ何かゝ己れの爲の何に當るか知れはしない、話さないでもお前は大抵知つて居るだらうけれど今の傘屋に奉公する前は矢張己れは角兵衛の獅子を冠つて歩いたのだからと打しをれて、お京さん己れが本當に乞食の子ならお前は今までのやうに可愛がつては呉れないだらうか、振向いて見ては呉れまいねと言ふに、申藏をお言ひでないお前が何のやうな人の子で何んな身かそれは知らないが、何だからとつて厭がるも厭がらないも言ふ事は無い、お前は平常の氣に似合ぬ情ない事をお言ひだけれど、私が少しもお前の身なら非人でも乞食でも擯ひはない、親が無からうが兄弟が何うだらうが身一つ出世をしたらば宜からう、何故其樣な意氣地なしをお言ひだと勵ませば、己れは何うしても駄目だよ、何にも爲やうとも思はない、と下を向いて顏をば見せざりき。

（中）

今は亡せたる傘屋の先代に太つ腹のお松とて一代に身上をあげたる、女相撲のやうな老婆樣あり き、六年前の冬の事寺參りの歸りに角兵衛の子供を拾ふて來て、いゝよ親方からやかましく言つて來たら其時の事、可愛想に足が痛くて歩かれないと言ふと朋輩の意地惡が罵去りに捨てて行つたと言ふ、其樣な處へ歸るに當るものか些とも怕かない事は無いから私が家に居なさい、みんなも心配する事は無い何の此子位のもの二人や三人、臺所へ板を並べてお飯を喰べさせるに文句が入るものか、判證文を取つた奴でも驅落をするものあれば持逃げの吝な奴もある、料簡次第のものだわな、いはゞ馬には乘つて見ろさ、役に立つか立たないか覘いて見なけりや知れはせん、お前新網へ歸るが厭なら此家を死場と極めて骨を折らなきやならないよ、えつかり遣つてお呉れと言ひ含められて、吉や〳〵と夫れよりの丹精今油ひきに、大人三人前を一手に引うけて鼻唄交り遣つて退ける腕を見るもの、流石に眼鏡と亡き老婆をほめける。

恩ある人は二年目に亡せて今の主も内儀樣も息子の半次も氣に喰はぬ者のみなれど、此處を死塲と定めたるなれば厭とて更に何方に行くべき、身は疳癪に筋骨つぎつてか人よりは一寸法師一寸法師と誹らるゝも口惜しきに、吉や手前は親の日に腥さを喰たであらう、ざまを見ろ廻りの廻りの小佛と朋輩の鼻垂れに仕事の上の仇を返されて、鐵拳に撲倒す勇氣はあれども滅に父

母いかなる日に失せて何時を精進日とも心得なき身の、心細き事を思ふては干塲の傘のかげに隱れて大地を枕に仰向き臥してはこぼるゝ涙を呑込みぬる悲しさ、四季押通し油びかりする目くら縞の筒袖を振つて火の玉のやうな子だと町内に恐がられる亂暴も慰むる人なき胸苦しさの餘り、假にも優しう言ふて呉れる人のあれば、ちがみ附いて取ついて離れがたなき思ひなり。仕事屋のお京は今年の春より此裏へと越して來し者なれど物事に氣才の利きて長屋中への交際もよく、大屋なれば傘屋の者へは殊更に愛想を見せ、小僧さん達着る物のほころびでも切れたなら私の家へ持つてお出、お家は御多人數お内儀さんの針持つていらつしやる暇はあるまじ、私は常住仕事疊紙と首つ引の身なればほんの一針造作は無い、一人住居の相手なしに毎日毎夜さびしくつて暮して居るなれば手すきの時には遊びにも來て下され、私は此樣ながら〳〵した氣なれば吉ちやんのやうな暴れさんが大好き、疳癪がおこつた時には表の米屋が白犬を擲ると思ふて私の家の洗ひかへしを光澤出しの小槌に、碪うちでも遣りに來て下され、それならばお前さんも人に憎まれず私の方でも大助かり、ほんに兩爲で御座んすほどにと慇言まじり何時となく心安く、お京さんお京さんとて入浸るを職人ども挑發ては帶屋の大將のあちらこちら、桂川の幕が出る時はお半の脊に長右衛門と唱はせて彼の帶の上へちよこなんと乘つて出るか、此

奴は好いお茶番だと笑はれるに、男なら眞似て見ろ、仕事やの家へ行つて茶棚の奥〻菓子鉢の中に、今日は何が何箇あるまで知つて居るのは恐らく己れの外には有るまい、質屋の兀頭めお京さんに首つたけで、仕事を頼むの何が何うしたのと小うるさく這入込んでは前だれの半襟の帶つ皮のと附屆をして御機嫌を取つては居るけれど、つひしか喜んだ挨拶をした事が無い、ましてや夜でも夜中でも傘屋の吉が來たとさへ言へば襤褸着のまゝで格子戸を明けて、今日は一日遊びに來なかつたね、何うかお爲か、案じて居たにと手を取つて引入れられる者が他にあらうか、お氣の毒樣なこつたが獨活の大木は役にたゝない、山椒は小粒で珍重されると高い事をいふに、此野郎めと脊を酷く打たれて、有がたう御座いますと澄まして行く顏つき身長さへあれば人串戯とて恕すまじけれど、一寸法師の生意氣と爪はじきして好い嬲りものに烟草休みの話しの種なりき。

(下)

十二月三十日の夜、吉は坂上の得意場へ誂への日限の遲れしを詫びに行きて、歸りは懷手の急ぎ足、草履下駄の先にかゝるものは面白づくに蹴かへして、ころ〳〵と轉げるを右に左に追ひ

かけては大海の中へ蹴落して一人から〳〵の高笑ひ、聞く者なくて天上のお月さま宛も皓々と照し給ふを寒いといふ事知らぬ身なれば唯こゝちよく爽かにて、歸りは例の窓を敲いてと目算ながら横町を曲れば、いきなり後より追ひすがる人の、兩手に目を隱して忍び笑ひをするに、誰れだ誰れだと指を撫でゝ、何だお京さんか、小指のまむしが物を言ふ、嚇かしても駄目だよと顏を振のけるに、憎らしい當てられて仕舞つたと笑ひ出す。お京はお高祖頭巾眉深に風通の羽織着て例に似合ぬ美き粧なるを、吉三は見あげ見おろして、お前何處へ行きなすつたの、今日明日は忙がしくてお飯を喰べる間もあるまいと言ふたではないか、何處へお客樣にあるいて居たのと不審を立てられて、取越しの御年始さと素知らぬ顏をすれば、嘘を言つてるぜ三十日の年始を受ける家は無いやな、親類へでも行きなすつたかと問へば、とんでもない親類へ行くやうな身に成つたのさ、私は明日あの裏の移轉をするよ、あんまりだしぬけだから嘸お前おどろくだらうね、私も少し不意なのでまだ本當とも思はれない、兎も角喜んでお呉れ悪い事では無いからと言ふに、本當か、本當か、と吉は呆れて、嘘では無いか申戯では無いか、其樣な事を言つておどかして呉れなくても宜い、己れはお前が居なくなつたら少しも面白い事は無くなつて仕舞ふのだから其樣な厭な戯言は廢しにしてお呉れ、えゝ詰らない事を言ふ人だと頭をふ

るに、嘘ではないよ何時かお前が言つた通り上等の運が馬車に乗つて迎ひに來たといふ騒ぎだから彼處の裏には居られない、吉ちやん其うちに糸織ぞろひを調製へて上るよと言へば、厭だ、己れは其樣な物は貰ひたくない、お前その好い運といふは詰らぬ處へ行かうといふのではないか、一昨日自家の半次さんが左樣言つて居たに、仕事やのお京さんは八百屋横町に按摩をして居る伯父さんが口入れで何處のかお邸へ御奉公に出るのださうだ、何お小間使ひといふ年ではなし、奥さまのお側やお縫物師の譯はない、三つ輪に結つて總の下つた被布を着るお妾さまに相違は無い、何うしてあの顔で仕事やが通せるものかと此樣な事を言つて居た、己れは其樣な事は無いと思ふから、聞違ひだらうと言つて大喧嘩を遣つたのだが、お前もしや其處へ行くのでは無いか、其お邸へ行くのであらう、と問はれて、何も私だとて行きたい事は無いけれど行かなければならないのさ、吉ちやんお前にもゝう逢はれなくなるねえ、とて唯言ふことながら蔑れて聞ゆれば、どんな出世に成るのか知らぬが其處へ行くのは廢したが宜からう、何もお前女口一つ針仕事で通せない事もなからう、あれほど利く手を持つて居ながら何故つまらない其樣な事を始めたのか、あんまり情ないではないかと吉は我身の潔白に較べて、お廢しよ、お廢しよ、斷つてお仕舞なと言へば、困つたねとお京は立止まつて、それでも吉ちやん私は洗ひ張

に倦きが來て、もうお妾でも何でも宜い、何うで此樣な詰らないづくめだから、いつその腐れ縮緬着物で世を過ごさうと思ふのさ。

思ひ切つた事を我れ知らず言つてはゝと笑ひしが、兎も角も家へ行かうよ、吉ちやん少しお急ぎと言はれて、何だか己れは根つから面白いとも思はれない、お前まあ先へお出よと後に附いて、地上に長き影法師を心細げに踏んで行く、いつしか傘屋の路次を入つてお京が例の窓下に立てば、此處をば毎夜音づれて呉れたのなれど、明日の晩はもう、お前の聲も聞かれない、世の中つて厭なものだねと歎息するに、それはお前の心がらだとて不滿らしう吉三の言ひぬ。

お京は家に入るより洋燈に火を點して、火鉢を掻きおこし、吉ちやんやお焙りよと聲をかけるに己れは厭だと言つて柱際に立つて居るを、それでもお前寒からうではないか風を引くといけないと氣を附ければ、引いても宜いやね、搏はずに置いてお呉れと下を向いて居るに、お前は何うかおしか、何だか可笑しな樣子だね私の言ふ事が何か癪にでも障つたの、それなら其やうに言つて呉れたが宜い、默つて其樣な顔をして居られると氣に成つて仕方が無いと言へば、氣になんぞ懸けなくてもいゝよ、己れも傘屋の吉三だ女のお世話には成らないと言つて、凭かゝりし柱に脊を擦りながら、あゝ詰らない面白くない、己れは本當に何と言ふのだらう、いろい

ろの人が烏渡好い顔を見せて直樣つまらない事に成つて仕舞ふのだ、傘屋の先のお老婆さんも善い人であつたし、紺屋のお絹さんといふ縮れつ毛の人も可愛がつて呉れたのだけれど、お老婆さんは中風で死ぬし、お絹さんはお嫁に行くを厭がつて裏の井戸へ飛込んで仕舞つた、お前は不人情で己れを捨てゝ行くし、もう何も彼もつまらない、何だ傘屋の油ひきなんぞ、百人前の仕事をしたからとつて褒美の一つも出やうでは無し朝から晩まで一寸法師の言はれつゞけで、それだからと言つて一生經つても此身長が延びやうかい、待てば甘露といふけれど己れなんぞは一日々々厭な事ばかり降つて來やがる、一昨日半次の奴と大喧嘩をやつて、お京さんばかりは人の妾に出るやうな腸の腐つたのではないと威張つたに、五日とたゝずに兜をぬがなければ成らないのであらう、そんな嘘つ吐きの、ごまかしの、慾の深いお前さんを姉さん同樣に思つて居たが口惜しい、もうお京さんお前には逢はないよ、何うしてもお前には逢はないよ、長々御世話さま此處からお禮を申します、人をつけ、もう誰の事も當てにするものか、左樣なら、と言つて立あがり沓ぬぎの草履下駄足に引かくるを、あれ吉ちやんそれはお前勘違ひだ、何も私が此處を離れるとてお前を見捨てる事はしない、私はほんとに兄弟とばかり思ふのだもの其樣な愛想づかしは酷からう、と後から羽がひじめに抱き止めて、氣の早い子だねとお京の

諭せば、そんならお妾に行くを廢めにしなさるかと振かへられて、誰れも顧ふて行く處では無いけれど、私は何うしても斯うと決心して居るのだからそれは折角だけれど肯かれないよと首ふに、吉は涙の眼に見つめて、お京さん後生だから此肩の手を放しておくんなさい。

(この篇はもと國民之友に出したるものなり今回全集中に加へんことを懇請したるに民友社は喜んでこれを承諾せられたり記して以て同社が好意を謝す　著者遺族)

うらむらさき

(上)

夕暮の店先に郵便脚夫が投込んで行きし女文字の書狀一通、炬燵の間の洋燈のかげに讀んで、くる〳〵と帶の間へ卷收むれば起居に心の配られて物案じなる事一通りならず、おのづと色に見えて、結構人の旦那どの、何うぞしたかとお問ひのかゝるに、いえ、格別の事でも御座りませんけれど、仲町の姉が何やら心配の事が有るほどに、此方から行けば宜いのなれど、やかましやの良人が暇といふては毛筋ほども明けさせて呉れぬ五月蠅さ、夜分なりと歸りは此方から送らせうほどにお良人に願ふて烏渡來て呉れられまいか、待つて居る、と言ふ文面で御座ります、又まゝ娘と紛紜でも起りましたのか、氣の狹い人なれば何事も口には得言はで、たんと胸を痛くするが彼の人の性分、困りものでお座ります、とて態との高笑ひをして聞かせれば、はて扨氣の毒なと太い眉を寄せて、お前にすればたつた一人の同胞、善惡ともに分けて聞かねばならぬ役を笑ひ事にしては留かれまい、何事の相談か行つて樣子を見たらば宜からう、女は

氣の狹いもの、待つと成つては一時も十年のやうに思はれるであらうを、お前の懈りを我の故に取られて恨まれても德の行かぬ事、夜は格別の用も無し、早く行つて聽いて遣るがよからう、と可愛き妻が姉の事なれば、優しき許しの願はずして出るに、飛立つほど嬉しいを此方は態と色にも見せず、では行きませうかと不勝々々に簞笥へ手を懸れば、不實な事を言はずと早く行つて遣れ先方は何れほど待つて居るか知れはせぬぞ、と知らぬ事なれば佛性の旦那どの急き立つるに、心の鬼やおのづと面ぼてりして、胸には動悸の波たかゝり。

糸織の小袖を重ねて、縮緬の羽織にお高祖頭巾、背の高き人なれば夜風を厭ふ角袖外套のうつり能く、では行つて來ますると店口に駒下駄直させながら、太吉、太吉と小僧の背を人さし指の先に突いて、お舟こぐ眞似に精の出て店の品をばちよろまかされぬやうにしてお呉れ、私の歸りが遲いやうなら構はずと戸をば下して、行火へ焙るならいつまでも床の中へ入れて置いては成らないぞえ、さんは臺處の火のもとを心づけて、旦那のお枕もとへは例の通りお湯わかしにお烟草盆、忘れぬやうにして御不自由させますな、成るたけ早くは歸らうけれど、と硝子戸に手をかくれば、旦那どの聲をかけて車を言ふてやらぬか、何うで歩いては行かれまいにと甘たるき言葉、何の商人の女房が店から車に乘出すは榮耀の沙汰で御座ります、其處らの角から能

いほどに直切つて乘つて參りましよ、これでも勘定は知つて居ますに、と可愛らしい聲にて笑へば、世帶じみた事をと旦那どのが恐悦顔、見ぬやうにして妻は表へ立出でしが大空を見上げてほつと息を吐く時、曇れるやうの面もちいとゝ雲深う成りぬ。

何處の姉樣からお手紙が來やうぞ、眞赤な嘘をと我家の見返られて、何事も御存じなしによいお顏をして暇を下さる勿躰なさ、あのやうな毒の無い、物疑ひといふては露ほどもお持ちなさらぬ心のうつくしい人を、能うも能うも舌三寸に欺しつけて心のまゝの不義放埒、これがまあ人の女房の所業であらうか、何といふ惡者の、人でなしの、法も道理も無茶苦茶の犬畜生のやうな心であらう、此樣ないたづらの畜生をば、御存じの無い事とて天にも地にも無いかのやうに可愛がつて下すつて、私が事と言へば御自分の身を無い物にして言葉を立てさせて下さる思召、有難い嬉しい恐ろしい、餘りの勿躰なさに涙がこぼれる、あのやうな良人を持つ身の何が不足で劔の刃渡りするやうな危險い計較をするのやら、可愛さうにあの人の好い仲町の姉さんまでを引合ひにして三方四方嘘で固めて、此足はまあ何處へ向く、思へば私は惡黨人でなし、いたづら者の不義者の、まあ何といふ心得違ひ、と辻に立つて歩みも得やらず、横町の角二つ曲りて今は我家の軒は見えぬを、振かへりては熱き涙のはら〳〵とこぼれぬ。

良人の名は[illegible]原東二郎、西洋小間物の店は名ばかりに、有あまる身代を藏の中に寐かして、さりとは當世の算用知らぬ人よし男に、戀女房のお律が手ばしこさ奥も表も平手に揉んで、美くしい眦に良人が立つ腹をも柔げれば、可愛らしい口元からお客樣への世辭も出る、年もねつから行きなさら[illegible]お怜悧なお内儀さまと見るほどの人褒め物の、此人此身が裏道の働き、人は知らじと自ら晦ませども、優しき良人が心ざし生憎纏はる心地してお律は路傍に立すくみしまゝ、行くまいか行くまいか、寧思ひ切つて行くまいか、今日までの罪は今日までの罪、今から私が氣さへ改めれば、彼のお人とてさのみ未練は仰しやるまじく、お互ひに清いお交際をして人知らぬうちに汚れを雪いで仕舞つたなら、今から後のあの方の爲、私の爲、生中こがれて附纏ふたとて、晴れて添はれる中ではなし、可愛い人に不義の名を着せて少しも是れが世間に知れたら何とせう、私は兎も角あの方はこれからの御出世前一生を暗黑にさせまして、それで私は滿足に思はれやうか、おゝ厭な事恐ろしい、何と思ふて私は逢ひに出て來たか、よしやお文が千通來やうと行さへせねばお互ひ疵には成るまいもの、もう思ひ切つて歸りませう、歸りませう、歸りませう、歸りませう、えゝもう私は思ひ切つたと路引違へて駒下駄を返せば、生憎夜風の身に寒〳〵、夢のやうなる考へ又もやふつと吹破られて、えゝ私は其やうな心弱い事に

引かれてならうか、最初あの家に嫁入する時から、東二郎どのを良人と定めて行つたのでは無いものを、形は行つても心は決して遣るまいと極めて置いたを、今更に成つて何の義理はり、悪人でも、いたづらでも構ひは無い、お氣に入らずばお捨てなされ、捨てられゝば結句本望、あのやうな愚物樣を良人に奉つて吉岡さんを袖にするやうな考へを、何故しばらくでも持つたのであらう、私の命が有る限り、逢ひ通しましよ切れますまい、良人を持たうと奥樣お出來なさらうと此約束は破るまいと言ふて置いたを、誰れが何のやうに優しからうと、有難い事を言ふて呉れやうと、私の良人は吉岡さんの外には無いものを、もう何事も思ひますまい思ひますまいとて頭巾の上から耳を押へて急ぎ足に五六歩かけ出せば、臨の動悸のいつしか絶えて、心靜かに氣の冴えて色なき唇には冷かなる笑みさへ浮びぬ。

たけくらべ

(一)

廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お歯ぐろ溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、明けくれなしの車の往來にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は佛くさけれど、さりとは陽氣の町と住みたる人の申しき、三島神社の角をまがりてよりこれぞと見ゆる家もなく、かたぶく檐端の十軒長屋二十軒長屋、商ひはかつふつ利かぬ處とて半さしたる雨戸の外に、あやしき形に紙を切りなして、胡粉ぬりくり彩色のある田樂みるやう、裏にはりたる申のさまもをかし、一軒ならず二軒ならず、朝日に干して夕日に仕舞ふ手當ことゝしく、一家内これにかゝりてそれは何ぞと問ふに、知らずや霜月酉の日例の神社に恣深樣のかつぎ給ふ是れぞ熊手の下でしらへといふ、正月門松とりすつるよりかゝりて、一年うち通しの夫れは賊の商賣人、片手わざにも夏より手足を色どりて、新年着の支度もこれをば當てぞかし、南無や大鳥大明神、買ふ人にさへ大福をあたへ給へば製造もとの我等萬倍の利益をと人ごとに言ふめれど、

さりとは思ひのほかなるもの、此あたりに大長者の噂も聞かざりき、住む人の多くは廓者にて其人は小格子の何とやら、下足札そろへてがらんがらんの音もいそがしや夕暮より羽織引かけて立出づれば、うしろに切火打かくる女房の顔もこれが見納めか十人ぎりの側杖無理情死のしそこね、恨みばかゝる身のはて危く、すはと言はゝ命がけの勤めに遊山らしく見ゆるもをかし、娘は大籬の下新造とやら、七軒の何屋が客廻しとやら、提燈さげてちよこちよこ走りの修業、卒業して何にかなる、とかくは檜舞臺と見立つるもをかしからずや、垢ぬけのせし三十あまりの年増、小ざつぱりとせし唐機ぞろひに紺足袋はきて、雪駄ちやら〳〵忙がしげに横抱きの小包は問はでも走るし、茶屋が棧橋どんと沙汰して、廻り遠や此處からあげまする、誂へ物の仕事やさんと此あたりには言ふぞかし、一體の風俗よそと變りて、女子の後帶きちんとせし人少く、がらを好みて巾廣の巻帶、年増はまだよし、十五六の小癪なるが酸漿ふくんで此姿は と目をふさぐ人もあるべし、處がら是非もなや、昨日河岸店に何紫の源氏名耳に殘れど、けふは地廻りの吉と手馴れぬ燒鳥の夜店を出して、身代たゝき骨になれば再び古巣への内儀姿、どこやら素人よりは見よげに覺えて、これに染まらぬ子供もなし、秋は九月仁和賀の頃の大路を見給へ、さりとは能くも學びし露八が物真似、榮喜が所作、孟子の母やおどろかん上達の速

かさ、うまいと褒められて今宵も一廻りと生意氣は七つ八つよりつのりて、やがては肩に留手ぬぐひ、鼻歌のそゝり節、十五の少年がませかた恐ろし、學校の唱歌にもぎっちょんちょんと拍子を取りて、運動會に木やり音頭もなしかねまじき風情、さらでも教育はむづかしきに教師の苦心さこそと思はるゝ入谷ぢかくに育英舍とて、私立なれども生徒の數は千人近く、狹き校舍に目白押の窮屈さも教師が人望いよ〳〵あらはれて、唯學校と一口にて此あたりには呑込みのつく程なるがあり、通ふ子供の數々に或は火消爲人足、おとつさんは刎橋の番屋に居るよと習はずして知る其道のかしこさ、梯子のりのまねびにアレ忍びがへしを折りましたと訴へのつべこべ、三百といふ代言の子もあるべし、お前の父さんは馬だねえと言はれて、名のりや辛き子心にも顔あからめるしほらしさ、出入りの娼家の秘藏息子寮住居に華族さまを氣取りて、ふさ附き帽子面もちゆたかに洋服かる〳〵と花々しきを、坊ちやん坊ちやんとて此子の追從するもをかし、多くの中に龍華寺の信如とて、千筋となづる黒髪も今幾歳のさかりにか、やがては墨染にかへぬべき袖の色、發心は服からか、坊は親ゆづりの勉強ものあり、性來おとなしきを友達いぶせく思ひて、さま〳〵の悪戯をしかけ、猫の死骸を繩にくゝりてお役目なれば引導をたのみますと投げつけし事もありしが、それは昔、今は校内一の人とて尚にも侮りて、の所業は

なかりき、歳は十五、並脊にていが栗の頭髪も思ひなしか俗とは變りて、藤本信如と訓にてすませど、何處やら釋といひたげの素振なり。

（二）

八月廿日は千束神社のまつりとて、山車屋臺に町々の見得をはりて土手をのぼりて廓内までも入込まんず勢ひ、若者が氣組み思ひやるべし、聞かぢりに子供とて油斷のなりがたき此あたりのなれば、そろひの浴衣は言はでものこと、銘々に申合せて生意氣のありたけ、聞かば勝もつぶれぬべし、横町組と自らゆるしたる亂暴の子供大將に頭の長とて歳も十六、仁和賀の鐵棒に親父の代理をつとめしより氣位えらくなりて、帶は腰の先に、返事は鼻の先にていふものと定め、にくらしき風俗、あれが頭の子でなくばと爲人足が女房の蔭口に聞えぬ、心一ぱいに我がまゝを通して身に合はぬ巾をも廣げしが、表町に田中屋の正太郎とて歳は我れに三つ劣れど、家に金あり身に愛敬あれば人も憎まぬ當の敵あり、我れは私立の學校へ通ひしを、先方は公立なりとて同じ唱歌も本家のやうな顔をしをる、去年も一昨年も先方には大人の末社がつきて、まつりの趣向も我れよりは花を咲かせ、喧嘩に手出しのなりがたき仕組みもありき、今年又も

や負けにならば、誰れたと思ふ横町の長吉だぞと、平常の力だては空ゐばりとけなされて、辨天ぼりに水およぎの折も我が組になる人は多かるまじ、力を言はゞ我が方がつよけれど、田中屋が柔和ぶりにごまかされて、一つは學問が出來をるを恐れ、我が横町組の太郎吉、三五郎などと、内々は彼方がたに成りたるも口惜し、まつりは明後日、いよ〳〵我が方が負け色と見えたらば、破れかぶれに暴れて暴れて、正太郎が面に疵一つ、我れも片眼片足なきものと思へば爲やすし、加擔人は車屋の丑に元結よりの文、手遊屋の彌助などあらば引けは取るまじ、おゝそれよりは彼の人の事彼の人の事、藤本のならば宜き智慧も貸してくれんと、十八日の暮れちかく、物いへば眼口にうるさき蚊を拂ひて竹村しげき龍華寺の庭先から信如が部屋へのそりのそりと、信さん居るかと顔を出しぬ。

己れの爲る事は亂暴だと人がいふ、亂暴かも知れないが口惜しい事は口惜しいや、なあ聞いとくれ信さん、去年も己れが處の末弟の奴と正太郎組の短小野郎と萬燈のたゝき合ひから始まつて、それといふと奴の仲間がばらばらと飛出しやあがつて、どうだらう小さな者の萬燈を打こわしちまつて、胴揚にしやがつて、見やがれ横町のざまをと一人がいふと、間拔に脊のたかい大人のやうな面をして居る團子屋の頓馬が、頭もあるものか尻尾だ尻尾だ、豚の尻尾だなんて

悪口を言つたとさ、己らあ其時千束様へぬり込んで居たもんだから、あとで聞いた時に直様仕かへしに行かうと言つたら、父さんに頭から小言を喰つて其時も泣寝入、一昨年はそらね、お前も知つてる通り鉦屋の店へ表町の若い衆が寄合て茶番か何かやつたらう、あの時己れが見に行つたら、横町は横町の趣向がありませうなんて、おつな事を言ひやがつて、正太ばかり客にしたのも胸にあるわな、いくら金が有るとつて質屋のくづれの高利貸が何たら様だ、あんな奴を生して置くより擲きころす方が世間のためだ、己らあ今度の祭りには如何しても亂暴に仕掛けて取かへしを附けやうと思ふよ、だから信さん友達がひに、それはお前が厭だといふのも知れてるけれども何卒己れの肩を持つて、横町組の耻をすゝぐのだから、ね、おい、本家本元の唱歌だなんて威張りをる正太郎を取ちめて呉れないか、己れが私立の寝ぼけ生徒といはれゝばお前の事も同然だから、後生だ、どうぞ、助けると思つて大萬燈を振廻しておくれ、己れは心から底から口惜しくつて、今度負けたら長吉の立端は無いと無茶にくやしがつて大幅の肩をゆすりぬ。だつて僕は弱いもの。弱くても宜いよ。萬燈は振廻せないよ。振廻さなくても宜いよ。僕が道入ると負けるが宜いかえ。負けても宜いのさ、それは仕方が無いと諦めるから、お前は何も爲ないで宜いから唯横町の組だといふ名で、威張づてさへ呉れると豪氣に人氣がつくから

ぬ、己れは此様な没分曉漢だのにお前は學が出來るからね、向ふの奴が漢語か何かで冷かしでも言つたら、此方も漢語で仕返しておくれ、あゝ好い心持ださつぱりしたお前が承知をしてくれゝばもう千人力だ、信さん難有うと常に無い優しき言葉も出づるものなり。

一人は三尺帯に突かけ草履の仕事師の息子、一人はかわ色金巾の羽織に紫の兵子帯といふ坊様仕立、思ふ事はうらはらに、話しは常に喰ひ違ひがちなれど、長吉は我が門前に産聲を揚げしものと大和尚夫婦が最負もあり、同じ學校へかよへば私立々々とけなされるも心わるきに、元來愛敬のなき長吉なれば心から味方につく者もなき憐れさ、先方は町内の若い衆どもまで尻押をして、ひがみでは無し長吉が負けを取ること罪は田中屋方に少からず、見かけて頼まれし義理としても厭とは言ひかねて信如、それではお前の組になるさ、なるといつたら嘘は無いが、成るべく喧嘩は爲ぬ方が勝だよ、いよ〳〵先方が賣りに出たら仕方が無い、何いさと言へば田中の正太郎位小指の先さと、我が力の無いは忘れて、信如は机の抽斗から京都みやげに貰ひたる、小鍛冶の小刀を取出して見すれば、よく切れさうだねえと覗き込む長吉が顔、あぶなし此物を振廻してなることか。

（三）

解かば足にもといくべき髪を、根あがりに堅くつめて前髪大きく髷おもたげの、赭熊といふ名は恐ろしけれど、これを此頃の流行とて良家の令嬢も遊ばさるゝぞかし、色白に鼻筋とほりて、口もとは小さからねど締りたれば醜からず、一つ一つに取たてゝは美人の鑑に遠けれど、物いふ聲の細く清しき、人を見る目の愛敬あふれて、身のこなしの活々したるは快きものなり、柿色に蝶鳥を染めたる大形の浴衣きて、黒繻子と染分絞りの晝夜帯胸だかに、足にはぬり木履こゝらあたりにも多くは見かけぬ高きをはきて、朝湯の歸りに頸筋白々と手拭さげたる立姿を、今三年の後に見たしと廓がへりの若者は申しき、大黒屋の美登利とて生國は紀州、言葉のいさゝか訛れるも可愛く、第一は切れ離れよき氣象を喜ばぬ人なし、子供に似合ぬ銀貨入れの重きも道理、姉なる人が全盛の餘波、延いては遣手新造が姉への世辭にも、美いちやん人形をお買ひなされ、これはほんの手鞠代と、呉れるに恩を着せねば貰ふ身の有がたくも覺えず、まくはまくは、同級の女生徒二十人に揃ひのごむ鞠を與へしはおろかの事、馴染の筆やに店ざらしの手遊を買しめて悦ばせし事もあり、さりとて日々夜々の散財此歳この身分にて叶ふべきにあら

ず、末は何となる身ぞ、兩親ありながら大目に見てあらき詞をかけたる事も無く、樓の主が大切がる樣子も怪しきに、聞けば養女にもあらず親戚にてはもとより無く、姉なる人が身賣りの當時、鑑定に來りし樓の主が誘ひにまかせ、此地に活計もとむとて親子三人が旅衣、たち出でしは此譯、それより奥は何なれや、今は寮のあづかりをして母は遊女の仕立物、父は小格子の書記に成りぬ、此身は遊藝手藝學校にも通はせられて、其ほかは心のまゝ、半日は姉の部屋、半日は町に遊んで見聞くは三味に太鼓にあけ紫のなり形、はじめ藤色絞りの半襟を袷にかけて着て歩きしに、田舍者ゐなか者と町内の娘どもに笑はれしを口惜しがりて、三日三夜泣きつゞけし事もありしが、今は我れより人々を嘲りて、野暮な姿と打つけの悪まれ口を、言ひ返す者もなくなりぬ。二十日はお祭りなれば心一ぱい面白い事をしてと友達のせがむに、趣向は何なりと各自に工夫して大勢の好い事がいゝではないか、幾金でもいゝ私が出すからとて例の通り勘定なしの引受けに、子供仲間の女王樣又とあるまじき惠みは大人よりも利きが早く、茶番にしやう、何處のか店を借りて往來から見えるやうにしてと一人が言へば、馬鹿を言へ、それよりはお神輿をこしらへてお呉れな、沛田屋の奥に飾つてあるやうな本當のを、重くても構ひはしない、やつちよいやつちよい譯なしだと捩鉢巻をする男子の傍から、それでは私たちが詰

らない、皆が騒ぐを見るばかりでは美登利さんだとて面白くはあるまい、何でもお前の好い物におしよと、女の一むれは祭りを抜きに常磐座をと、言ひたげの口振をかし、田中の正太は可愛らしい眼をぐ〳〵ると動かして、幻燈にしないか、幻燈に、己れの處にも少しは有るし、足りないのを美登利さんに買つて貰つて、筆やの店でやらうではないか、己れが映し人で横町の三五郎に口上を言はせやう、美登利さんそれにしないかと言へば、あゝそれは面白からう、三ちやんの口上ならば誰れも笑はずには居られまい、序にあの顔がうつると猶おもしろいと相談はとゝのひて、不足の品を正太が買物役、汗になりて飛び廻るもをかしく、いよ〳〵明日となりては横町までも其沙汰聞えぬ。

(四)

打つや鼓のさらべ、三味の音色に事かゝぬ場處も、祭りは別物、酉の市を除けては一年一度の賑ひぞかし、三島さま小野照さま、お隣社づから負けまじの競ひ心をかしく、横町も表も揃ひは同じ真岡木綿に町名くづしを、去歳よりはよからぬ形どつぷやくもありし、くちなし染の麻だすき成る程太きを好みて、十四五より以下なるは、達磨、木兎、犬はり子、さま〳〵の手

遊を數多きほど見得にして、七つ九つ十一着くるもあり、大鈴小鈴脊中にがらつかせて、駈け出す足袋はだしの勇ましく可笑し、群れを離れて田中の正太が赤筋入りの印半天、色白の頸筋に紺の腹がけ、さりとは見なれぬ扮粧とおもふに、しごいて締めし帶の水淺黄も、見よや縮緬の上染、襟の印のあがりも際立ちて、うしろ鉢巻に山車の花一枝、草履の雪駄おとのみはすれど、馬鹿ばやしの仲間には入らざりき、夜宮は事なく過ぎて今日一日の日も夕ぐれ、筆やが店に寄合ひしは十二人、一人かけたる美登利が夕化粧の長さに、未だか未だかと正太は門へ出つ入りつして、呼んで來い三五郎、お前はまだ大黒屋の寮へ行つた事があるまい、庭先から美登利さんと言へば聞える筈、早く、早くと言ふに、それならば己れが呼んで來る、萬燈は此處へあづけて行けば誰れも蠟燭ぬすむまい、正太さん番をたのむとあるに、吝嗇な奴め、其手間で早く行けと我が年下に叱られて、おつと來たさの次郎左衛門、今の間とかけ出して章駄天とはこれをや、あれあの飛びやうが可笑しいとて見送りし女子どもの笑ふも無理ならず、横ぶとりして脊ひくゝ、頭の形は才槌とて頸みぢかく、振むけての面を見れば出額の獅子鼻、反齒の三五郎といふ仇名おもふべし、色は論なく黒きに感心なは目つき何處までもおどけて兩の頬に笑くぼの愛敬、目かくしの福笑ひに見るやうな眉のつき方も、さりとはをかしく罪の無き子なり、

貧なれや阿波ちゝみの筒袖、己れは揃ひが間に合はなんだと知らぬ友には言ふぞかし、我れを頭に六人の子供を、養ふ親も轅棒にすがる身なり、五十軒によき得意場は持ちたりとも、内証の車は商賣ものゝ外なれば詮なく、十三になれば片腕と一昨年より並木の活版所へも通ひしが、懶惰ものなれば十日の辛防つゝかず、一月と同じ職も無くて霜月より巷へかけては突羽根の内職、夏は檢査場の氷屋が手傳ひして、呼聲をかしく客を引くに上手なれば、人には重寶がられぬ、去年は仁賀和の臺曳きに出でしより、友達いやしがりて萬年町の呼名今に殘れども、三五郎といへば滑稽者と承知して憎む者の無きも一德なりし、田中屋は我が命の綱、親子が蒙る御恩すくなからず、日歩とかや言ひて利金安からぬ借りなれど、これなくてはの金主樣あたには思ふべしや、三公己れが町へ遊びに來いと呼ばれて厭とは言はれぬ義理あり、されども我れは横町に生れて横町に育ちたる身、住む地處は龍華寺のもの、家主は長吉が親なれば、表むき彼方に背く事かなはず、内々に此方の用をたして、にらまるゝ時の役廻りつらし。正太は筆やの店へ腰をかけて、待つ間のつれ〴〵に忍ぶ戀路を小聲にうたへば、あれ油斷がならぬと内儀さまに笑はれて、何がなしに耳の根あかく、まちくなひの高聲に皆も來いと呼びつれて表へ驅け出す出合頭、正太は夕飯なぜ喰べぬ、遊びに髦けて先刻にから呼ぶをも知らぬか、何方も又の

ちほど遊ばせて下され、これはお世話と筆やの妻にも挨拶して、祖母が自らの迎ひに正太いやが言はれず、其まゝ連れて歸らるゝあとは俄かに淋しく、人數はさのみ變らねど彼の子が見えねば大人までも寂しい、馬鹿さわぎもせねば戯言も三ちやんのやうではなけれど、人好きのするは金持の息子さんに珍らしい愛敬、何と御覽じたか田中屋の後家さまがいやらしさを、あれで年は六十四、白粉をつけぬがめつけ物なれど丸髷の大きさ、猫なで聲して人の死ぬをも搆はず、大方終焉は金と情死なさるやら、それでも此方どもの頭の上らぬは彼の物の御威光、さりとは欲しや、廓内の大きい樓にも大分の貸附があるらしう聞きましたと、大路に立ちて二三人の女房よその財產を數へぬ。

(五)

待つ身につらき夜半の置炬燵、それは戀ぞかし、吹風すゝしき夏の夕ぐれ、ひるの暑さを風呂に流して、身じまひの姿見、母親が手づからそゝけ髮つくろひて、我が子ながら美くしきを立ちて見、居て見、頸筋が薄かつたと猶ぞいひける、單衣は水色友仙の涼しげに、白茶金らんの丸帶少し幅の狹いを結ばせて、庭石に下駄直すまで時は移りぬ。まだかまだかと塀の周圍を七

たび廻り、欠伸の數も盡きて、抑ふとすれど名物の蚊に首筋額際したゝか螫され、三五郎弱りきる時、美登利立出でゝいざと言ふに、此方は言葉もなく袖を捉へて驅け出せば、息がはづむ、胸が痛い、そんなに急ぐならば此方は知らぬ、お前一人でお出と怒られて、別れ別れの到着、筆やの店へ來し時は正太が夕飯の最中とおぼえし。あゝ面白くない、面白くない、彼の人が來なければ幻燈をはじめるのも嫌、伯母さん此處の家に智慧の板は賣りませぬか、十六武藏でも何でもよい、手が閑で困ると美登利の淋しがれば、それよと即坐に鋏を借りて女子づれは切拔きにかゝる、男は三五郎を中に仁和賀のさらひ、北廓全盛見わたせば、軒は提燈電氣燈、いつも賑ふ五丁町と、諸聲をかしくはやし立つるに、記憶のよければ去年一昨年とさかのぼりて、手振手拍子ひとつも變る事なし、うかれ立たる十人あまりの騷ぎなれば何事と門に立ちて人垣をつくりし中より、三五郎は居るか、一寸來てくれ大急ぎだと、文次といふ元結よりの呼ぶに、何の用意もなくおいしよ、よし來たと身輕に敷居を飛こゆる時、此二股野郎覺悟をしろ、横町の面よごしめ唯は置かぬ、誰れだと思ふ長吉だ生ふざけた真似をして後悔するなと頬骨一擊、あつと魂消て逃入る襟がみを、つかんで引出す横町の一むれ、それ三五郎をたゝき殺せ、正太を引出してやつて仕舞へ、弱虫にげるな、團子屋の頓馬も唯は置かぬと潮のやうに沸かへる騒

ぎ、筆屋の軒の掛提燈は苦もなくたゝき落されて、釣らんぷ危險し店先の喧嘩なりませぬと女房が喚きも聞かばこそ、人數は大凡十四五人、ねぢ鉢巻に大萬燈ふりたてゝ、當るがまゝの亂暴狼藉、土足に踏込む傍若無人、目ざす敵の正太が見えねば、何處へ隱した、何處へ逃げた、さあ言はぬか、言はぬか、言はざずに置くものかと三五郎を取こめて擲つやら蹴るやら、美登利くやしく止める人を搔きのけて、これお前がたは三ちやんに何の咎がある、正太さんと喧嘩がしたくば正太さんとしたが宜い、逃げもせねば隱しもしない、正太さんは居ぬではないか、此處は私が遊び處、お前がたに指でもさゝしはせぬ、えゝ憎らしい長吉め、三ちやんを何故ぶつ、あれ又引倒した、意趣があらば私をおぶち、相手には私がなる、伯母さん止めずに下されと身もだへして罵れば、何を女郎め頬桁たゝく、姉の跡つぎの乞食め、手前の相手にはこれが相應だと多人數のうしろより長吉、泥草履つかんで投つければ、ねらひ違はず美登利が領際にむさき物したゝか、血相かへて立あがるを、怪我でもしてはと抱留むる女房、ざまを見ろ、此方には龍華寺の藤本がついて居るぞ、仕返しには何時でも來い、海馬鹿野郎め、弱虫め、腰ぬけの意氣地なしめ、歸りには待伏せする、横町の闇に氣をつけろと三五郎を土間に投出せば、折から靴音たれやらが交番への注進今ぞ知る、それと長吉聲をかくれば丑松文次その餘の十餘

人、方角をかへてばら〳〵と逃足はやく、抜け裏の路次にかゝむもあるべし、口惜しい口惜しい口惜しい、長吉め文次め丑松め、なぜ己れを殺さぬ、殺さぬか、己れも三五郎だ唯死ぬものか、幽靈になつても取殺すぞ、覺えて居ろ長吉めと湯玉のやうな涙はら〳〵、はては大聲にわつと泣き出す、身内や痛からん筒袖の處々引さかれて背中も腰も砂まぶれ、止めるにも止めかねて勢ひの凄まじさに唯おど〳〵と氣を呑まれし、筆やの女房走り寄りて抱き起し、背中をなで砂を拂ひ、堪忍おし、堪忍おし、何と思つても先方は大勢、此方は皆よわい者ばかり、大人でさへ手が出しかねたに叶はぬは知れて居る、それでも怪我のないは仕合、此上は途中の待ぶせが危險い、幸ひの巡査さまに家まで見て頂かば我々も安心、此通りの仔細で御座ります故と筋をあら〳〵折からの巡査に語れば、職掌がらいざ送らんと手を取らるゝに、いえいえ送つて下さらずとも歸ります、一人で歸りますと小さく成るに、こりや恐い事は無い、其方の家まで送る分の事、心配するなと微笑を含んで頭を撫でらるゝに彌々ちゞみて、喧嘩をしたと言ふと父さんに叱られます、頭の家は大屋さんで御座りますからとて慈れるを賺して、さらば門口まで送つて遣る、叱らるゝやうの事は爲ぬわとて連れらるゝに四隣の人胸を撫でゝ遙に見送れば、何とかしけん横町の角にて巡査の手をば振放して一目散に逃げぬ。

(十八)

めづらしい事、此炎天に雪が降りはせぬか、美登利が學校を嫌がるはよく〳〵の不機嫌、朝飯がすゝまずば後刻に鮨でも誂へやうか、風邪にしては熱も無ければ大方きのふの疲れと見える、太郎樣への朝參りは母さんが代理してやれば御免蒙れとありしに、いえ〳〵姉さんの繁昌するやうにと私が願をかけたのなれば、參らねば氣が濟まぬ、お賽錢下され行つて來ますと家を飛び出して、中田圃の稻荷に鰐口ならして手を合せ、願ひは何ぞ行きも歸りも首うなだれて畦路づたひ歸り來る美登利が姿、それと見て遠くより聲をかけ、正太はかけ寄りて袂を押へ、美登利さん昨夜は御免よと突然にあやまれば、何もお前に詫られる事は無い。それでも己れが憎まれて、己れが喧嘩の相手だもの、お祖母さんが呼びにさへ來なければ歸りはしない、そんなに無暗に三五郎をも打たしはしなかつたものを、今朝三五郎の處へ見に行つたら、彼奴も泣いて口惜しがつた、己れは聞いてさへ口惜しい、お前の顏へ長吉め草履を投げたと言ふではないか、あの野郎亂暴にもほどがある、だけれど美登利さん堪忍してお呉れよ、己れは知りながら逃げて居たのではない、飯を掻込んで表へ出やうとするとお祖母さんが湯に行くといふ、留守

居をして居るうちの騒ぎだらう、本當に知らなかつたのだからねと、我罪のやうに平あやまりにあやまつて、痛みはせぬかと額際を見あげれば、美登利につこり笑ひて何怪我をするほどではない、それだが正さん誰れが聞いても私が長吉に草履を投げられたと言つてはいけないよ、もし萬一お母さんが聞きでもすると私が叱られるから、親でさへ頭に手はあげぬものを、長吉づれが草履の泥を額にぬられては踏まれたも同じだからとて、背ける顔のいとをしく、ほんとに堪忍しておくれ、みんな己れが悪い、だからあやまる、機嫌を直して呉れないか、お前に怒られると己れが困るものをと話しつれて、いつしか我家の裏近く來れば、寄らないか美登利さん、誰れも居はしない、お祖母さんも日がけを集めに出たらうし、己ればかりで淋しくてならない、いつか話した錦繪を見せるからお寄りな、種々のがあるからと袖を捉へて離れぬに、美登利は無言にうなづいて、佗びた折戸の庭口より入れば、廣からねども鉢ものをかしく並びて、軒につり忍艸、これは正太が午の日の買物と見えぬ、理由しらぬ人は小首やかたぶけん町内一の財産家といふに、家内は祖母と此子二人、萬の鍵に下腹冷えて留守は見渡しの總長屋、流石に錠前くだくもあらざりき、正太は先へあがりて風入りのよき處を見たてゝ、此處へ來ぬかと團扇の氣あつかひ、十三の子供にはませ過ぎてをかし。

古くより持つたへし錦繪かず〳〵

取出し、褒めらるゝを嬉しく美登利さん昔の羽子板を見せやう、これは己れの母さんがお邸に奉公して居る頃いたゞいたのだとさ、をかしいではないか此大きい事、人の顔も今のとは違ふね、あゝ此母さんが生きて居ると宜いが、己れが三つの歳死んで、お父さんは在るけれど田舍の實家へ歸つて仕舞つたから今はお祖母さんばかりさ、お前は羨ましいねとそゞろに親の事を言ひ出せば、それ繪がぬれる、男が泣くものではないと美登利に言はれて、己れは氣が弱いのかしら、時々種々の事を思ひ出すよ、まだ今時分は宜いけれど、冬の月夜なにかに田町あたりを集めに廻ると土手まで來て幾度も泣いた事がある、何寒い位で泣きはしない、何故だか自分も知らぬが種々の事を考へるよ、あゝ一昨年から己れも日がけの集めに廻るさ、お祖母さんは年寄りだから其うちにも夜は危險いし、目が悪いから印形を捺したり何かに不自由だからね、今まで幾人も男を使つたけれど、老人に子供だから馬鹿にして思ふやうには動いて呉れぬとお祖母さんが言つて居たつけ、己れがもう少し大人に成ると質屋を出さして、昔の通りでなくても田中屋の看板をかけると樂しみにして居るよ、他處の人はお祖母さんを吝だと言ふけれど、己れの爲に儉約して呉れるのだから氣の毒でならない、樂金に行くうちでも通新町や何かに隨分可愛想なのが有るから、嫌お祖母さんを悪くいふだらう、それを考へると己れは涙がこぼれ

る、矢張り氣が弱いのだね、今朝も三公の家へ取りに行つたら、奴め身體が痛い癖に親父に知らすまいとして働いて居た、それを見たら己れは口が利けなかつた、男が泣くてえのは可笑しいではないか、だから横町の野蠻人に馬鹿にされるのだと言ひかけて我が弱いを耻かしさうな顏色、何心なく美登利と見合す目つきの可愛さ。お前の祭の姿は大層よく似合つて羨ましかつた、私も男だとあんな風がして見たい、誰れのよりも宜く見えたと賞められて、何だ己れなんぞ、お前こそ美くしいや、廓内の大巻さんよりも奇麗だと皆がいふよ、お前が姉であつたら己れはどんなに肩身が廣からう、何處へゆくにも隨從て行つて大威張りに威張るがな、一人も兄弟が無いから仕方が無い、ねえ美登利さん今度一處に寫眞を取らないか、己れは祭りの時の姿で、お前は透綾のあら縞で意氣な形をして、水道尻の加藤でうつさう、龍華寺の奴が羨ましがるやうに、本當だぜ、奴は屹度怒るよ、眞青に成つて怒るよ、にえ肝だからね、赤くはならないい、それとも笑ふかしら、笑はれても構はない、大きく取つて看板に出たら宜いな、お前は厭かえ、厭のやうな顏だものと恨めるものをかしく、變な顏にうつるとお前に嫌はれるからとて美登利ふき出して、高笑ひの美音に御機嫌や直りし。

朝凉はいつしか過ぎて日かげの暑くなるに、正太さん又晩によ、私の寮へも遊びにお出でな、

燈籠ながして、お魚追ひましよ、池の橋が直つたれば恐い事は無いと言ひ捨てに立出づる美登利の姿、正太うれしげに見送つて美くしと思ひぬ。

(七)

龍華寺の信如、大黒屋の美登利、二人ながら學校は育英舍なり、去りし四月の末つかた、櫻は散りて青葉のかげに藤の花見といふ頃、春季の大運動會とて水の谷の原にせし事ありしが、つな引、鞠なげ、繩とびの遊びに興をそへて長き日の暮るゝを忘れし、其折の事とや、信如いかにしたるか平生の沈着に似ず、池のほとりの松が根につまづきて赤土道に手をつきたれば、羽織の袂も泥に成りて見にくかりしを、居あはせたる美登利みかねて我が紅の絹はんけちを取出し、これにてお拭きなされと介抱をなしけるに、友達の中なる嫉妬や見つけて、藤本は坊主のくせに女と話をして、嬉しさうに禮を言つたは可笑しいではないか、大方美登利さんは藤本の女房になるのであらう、お寺の女房なら大黒さまと言ふのだなどゝ取沙汰しける、信如元來かる事を人の上に聞くも嫌ひにて、苦き顏して横を向く質なれば、我が事とてし我慢のなるべきや、それよりは美登利といふ名を聞くごとに恐ろしく、又あの事を言ひ出すかと胸の中もや

くやして、何とも言はれぬ厭な氣持なり、さりながら事ごとに怒りつける譯にもゆかねば、成るだけは知らぬ體をして、平氣をつくりて、むづかしき顏をして遣り過ぎる心なれど、さし向ひて物などを問はれたる時の當惑さ、大方は知りませぬの一言にて濟ませど、苦しき汗の身うちに流れて心ぼそき思ひなり、美登利はさる事も心にとまらねば、初めは藤本さん藤本さんと親しく物いひかけ、學校退けての歸りがけに、我れは一足はやくて道端に珍らしき花などを見つくれば、おくれし信如を待合して、これ此樣うつくしい花が咲いてあるに、枝が高くて私には折れぬ、信さんは背が高ければお手が屆きましよ、後生折つて下されと一むれの中にては年長なるを見かけて賴めば、流石に信如袖ふり切りて行過ぎる事もならず、さりとて人の思はくいよ〳〵つらければ、手近の枝を引寄せて好惡かまはず申譯ばかりに折りて、投つけるやうにすた〳〵と行過ぎるを、さりとは愛敬の無き人と惘れし事もありしが、度かさなりての末には おのづから故意の意地惡のやうに思はれて、人には然もなきに我れにばかりつらき仕打をみせ、物を問へば碌な返事した事なく、傍へゆけば逃げる、はなしをすれば怒る、陰氣らしい氣のつまる、どうして宜いやら機嫌の取りやうも無い、あのやうなむづかしやは思ひのまゝに捻れて怒つて意地わるが爲たいならんに、友達と思はずは口を利くも入らぬ事と美登利少し癪にさはりて、用の無ければ摺れ違ふても物いふた事なく、途中に逢ひたりとて挨拶など思ひもかけず、唯いつとなく二人の中に大川一つ横たはりて、舟も筏も此處には御法度、岸に添ふておもひおもひの道をあるきぬ。

祭りは昨日に過ぎて其あくる日より美登利の學校へ通ふ事ふつと跡たえしは、問ふまでも無く領の泥の洗ふても消えがたき耻辱を、身にしみて口惜しければぞかし、表町とて横町とて同じ教場におし並べば朋輩に異りは無き等を、をかしき分け隔てに常日頃意地を持ち、我れは女の、とても敵ひがたき弱味をば附目にして、まつりの夜の所爲はいかなる卑怯ぞや、長吉のわからずやは誰れも知る亂暴の上なしなれど、信如の尻おし無くばあれほどに思ひ切りて表町をば荒らし得じ、人前をば物識らしく温順につくりて、陰に廻りて機關の糸を引きしは藤本の仕業に極まりぬ、よし級は上にせよ、學は出來るにせよ、龍華寺さまの若旦那にせよ、大黑屋の美登利紙一枚のお世話にも預からぬものを、あのやうに乞食呼はりして貰ふ恩は無し、龍華寺はどれほど立派な檀家ありと知らねど、我が姉さま三年の馴染に銀行の川樣、兜町の米樣もあり、議員の短小さま根曳して奥さまにと仰せられしを、心意氣氣に入らねば姉さま嫌ひてお受けはせざりしが、彼の方とても世には名高きお人と選手衆の言はれし、嘘ならば聞いて見よ、大黑

やゝ大卷の居ずまひ彼の樓は閨とかや、されば店の旦那とても父さん母さん我が身をゝ粗略には遊ばさず、常々大切がりて床の間にお据ゑなされし瀬戸物の大黒様をば、我れいつぞや座敷の中にて羽根つくとて騒ぎし時、同じく並びし花瓶を仆し、散々に破損をさせしに、旦那次の間に御酒めし上りたゝから、美登利お轉婆が過ぎるのと言はれしばかり小言は無かりき、他の人ならば一通りの怒りではあるまじと、女衆達にあと〳〵まで羨まれしも畢竟は姉さまの威光ぞかし、我れ寮住居に人の留守居はしたりとも姉は大黒屋の大卷、長吉風情に敢けを取るべき身にもあらず、龍華寺の坊さまにいぢめられんは心外と、これより學校へ通ふ事おもしろからず、我まゝの本性あなどられしが口惜しさに、石筆を折り墨をすて、書籍も十露盤も入らぬ物にして、中よき友と埒も無く遊びぬ。

（八）

走れ飛ばせの夕に引かへて、明けの別れに夢をのせ行く車の淋しさよ、帽子まぶかに人目を厭ふ方様もあり、手拭とつて頬かぶり、彼女が別れに名殘の一打、いたさ身にしみて思ひ出すはど嬉しく、うす氣味わるやにた〳〵の笑ひ顔、坂本へ出でゝは用心し給へ千住がへりの青物車

にお足元あぶなし、三島様の角までは氣遣ひ街道、御顔のしまり何れも緩みて、はゞかりながら御鼻の下なが〳〵と見えさせたまへば、そんじよ其處らに夫れ大した御男子様とて、分厘の價値も無しと、辻に立ちて御慮外を申すもありけり、楊家の娘君霸をうけてと長恨歌を引出すまでもなく、娘の子は何處にも貴重がらるゝ頃なれど、此あたりの裏屋より赫奕姫の生るゝ事その例多し、築地の某屋に今は根を移して御前さま方の御相手、踊りに妙を得し雪といふ美形、唯今のお座敷にてお米のなります木はと至極あどけなき事ば申すとも、もとは此町の卷帶黛にて花がるたの内職せしものなり、評判は其頃に高く去るもの日々に疎げれば、名物一つかげを消して二度目の花は紺屋の乙娘、今千束町に新つた屋の御神燈ほのめかして、小吉と呼ばるゝ公園の尤物も根生ひは同じ此處の土なりし、あけくれの噂にも御出世といふは女に限りて、男は塵塚さがす黒斑の尾の、ありて用なき物とも見ゆべし、此界隈に若い衆と呼ばるゝ町並の息子、生意氣ざかりの十七八より五人組七人組、腰に尺八の伊達はなけれど、何とやら厳めしき名の親分が手下につきて、揃ひの手ぬぐひ長提燈、賽ころ振る事おぼえぬうちは素見の格子先に思ひ切つての串戯も言ひがたしとや、眞面目につとむる我が家業は盞のうちばかり、一風呂浴びて日の暮れゆけば突かけ下駄に七五三の着物、何屋の店の新妓を見たか、金杉の糸屋が娘

に似てもう一倍鼻がひくいと、頭腦の中を此樣な事にこしらへて、一軒ごとの格子に烟草の無理どり鼻紙の無心、打ちつ打たれつ是れを一世の譽と心得れば、堅氣の家の相續息子地廻りと改名して、大門際に喧嘩かひと出るもありけり、見よや女子の勢力と言はぬばかり、春秋しらぬ五丁町の賑ひ、送りの提燈いま流行らねど、茶屋が廻女の雪駄のおとに繼き通へる歌舞音曲うかれうかれて入込む人の何を目當と官問はい、赤えり赭熊に爾袒の裾ながく、につと笑ふ口元目もと、何處が美いとも申しがたけれど華魁衆として此處にての敬ひ、立はなれてば知るによしなし、かゝる中にて朝夕を過ごせば、衣の白地の紅に染む事無理ならず、美登利の眼の中に男といふ者さつても怖からず恐ろしからず、女郎といふ者さのみ賤しき勤めとも思はねば、過ぎし故郷を出立の當時泣いて姉をば送りしことと夢のやうに思はれて、今日此頃の全盛に父母への孝養うらやましく、お職を通す姉が身の、憂いの辛いの數も知らねば、まち人戀ふる鼠なき格子の咒文、別れの背に手加減の秘密まで、唯おもしろく聞なされて、廓ことばを町にいふまでさりとは耻かしからず思へるも哀なり、年はやう〳〵數へのはたち、人形抱いて頬ずりする心は御華族のお姫樣とて變りなけれど、修身の講義、家政學のいくたても學びしは學校にてばかり、誠あけくれ耳に入りしは好いた好かぬの客の風説、仕着せ積み夜具茶屋への行わたり、派

手は美事に、かなはぬは見すぼらしく、人事我事分別をいふはまだ早し、幼心に目の前の花のみはしるく、持まへの貧けし氣象は勝手に馳せ廻りて雲のやうな形をこしらへぬ、氣違ひ街道、寢ぼれ道、朝がへりの殿がた一順すみて朝寢の町も門の幕目青海波をえがき、打水よきほどに濟みし表町の通りを見渡せば、來るは來るは、萬年町山伏町、新谷町あたりを塒にして、一能一術これも藝人の名はのがれぬ、よか〳〵飴や輕業師、人形つかひ大神樂、住吉をどりに角兵衛獅子、おもひおもひの扮粧して、縮緬透綾の伊達もあれば、薩摩がすりの洗ひ着に黒繻子の幅狹帶、よき女もあり男もあり、五人七人十人一組の大たむろもあれば、一人淋しき痩せ老爺の破れ三味線かゝへて行くもあり、六つ五つなる女の子に赤襟させて、あれは紀の國をどらするも見ゆ、お顔客は廓内に居つゝけ客のなぐさみ、女郎の憂さ晴らし、彼處に入る身の生涯やめられぬ得分ありと知られて、來るも來るも此邊の町に細かゝき貰ひを心に留めず、裾に海松のいかゝはしき乞食さへ門には立たず行過ぎるぞかし、容貌よき女太夫の笠にかくれぬ床しの頬を見せながら、喉自慢、腕自慢、あれ彼の聲を此町には聞かせぬが憎しと筆やの女房舌うちして言へば、店先に腰をかけて往來を眺めし湯がへりの美登利、はらりと下る前髪の毛を黄楊の髮櫛にちやつと搔きあげて、伯母さんあの太夫さん呼んで來ませうとて、はた〳〵駆け

よつて袂にすがり、投げ入れし一品を誰れにも笑つて告げざりしが好みの明烏さらりと唄はせて、又御最負をの嬌音これたやすくは買ひがたし、あれが子供の所業かと寄集りし人舌を巻いて太夫よりは美登利の顏を眺めぬ、伊達には通るほどの藝人を此處にせき止めて、三味の音、笛の音、太鼓の音、うたはせて舞はせて人の爲ぬ事して見たいと折ふし正太に呼いて聞かせれば、驚いて呆れて己らは嫌だな。

(九)

如是我聞、佛說阿彌陀經、壁は松風に和して心のちりも吹拂はるべき御寺樣の庫裏より生魚あぶる烟なびきて、卵塔場に嬰兒の襁褓ほしたるなど、お宗旨によりて構ひなき事なれども、法師を木のはしと心得たる目よりは、そゝろに腥く覺ゆるぞかし、龍華寺の大和尙身代と共に肥え太りたる腹なり如何にも美事に、色つやの好きこと如何なる賞め言葉を參らせたらばよかるべき、櫻色にもあらず、緋桃の花でもなし、剃りたてたる頭より顏より首筋にいたるまで銅色の照りに一點のにごりも無く、白髮もまじる太き眉をあげて心まかせの大笑ひなさるゝ時は、本堂の如來さま驚きて蓮座より轉び落ち給はんかと危ぶまるゝやうなり、御新造はいま

だ四十の上を幾らも越さで、色白に髮の毛薄く、丸髷も小さく結ひて見苦しからぬまでの人から、參詣人へも愛想よく門前の花屋が口惡嬶も兎角の蔭口を言はぬを見れば、着ふるしの浴衣、總菜のお殘りなどおのづからの御恩も蒙るなるべし、もとは檀家の一人なりしが早くに亡人を失ひて寄る邊なき身の暫時こゝにお針やとひ同樣、口さへ濡らさせて下さらばとて洗ひ濯ぎよりはじめてお菜ごしらへは素よりの事、墓場の掃除に男衆の手を助くるまで働けば、和尙さま經濟より割出しての御ふびんかゝり、年は二十から違ふて見ともなき事は女も心得ながら、行き處なき身なれば結句よき死場所と人目を恥ぢぬやうになりけり、苦々しき事なれども女の心だて惡からねば檀家の者もさのみは咎めず、總潮の花といふを懷孕し頃、檀家の中にも世話好きの名ある坂本の油屋が隱居さま媒人といふ異なる物なれど勸めたてゝ表向きのものにしける、信如も此人の腹より生れて男女二人の同胞、一人は如法の變屈ものにて一日部屋の中にまち〳〵と陰氣らしき生れなれど、姉のお花は皮薄の二重腮可愛らしく出來たる子なれば、美人といふにはあらねども年頃といひ人の評判もよく、素人にして捨てゝ置くは惜しい物の中に加へぬ、さりとてお寺の娘に左り褄、お釋迦が三味ひく世は知らず人の聞え少しは憚られて、田町の通りに葉茶屋の店を奇麗にしつらへ、帳場格子の裡に此娘を据ゑて愛敬を賣らすれば、

秤りの目は兎に角勘定しらずの若い者など、何がなしに寄つて大方毎夜十二時を聞くまで店に客のかげ絶えたる事なし、いそがしきは大和尚、貸金の取たて、店への見廻り、法用のあれこれ、月の幾日は説教日の定めもあり帳面くるやら經よむやら斯くては身體のつゝき難しと夕暮れの縁先に花むしろを敷かせ、片肌ぬぎに團扇づかひしながら大盃に泡盛をなみ〳〵と注がせて、さかなは好物の鯖焼を表町のむさし屋へあらい處をとの誂へ、承りてゆく使ひ番は信如の役なるに、其厭なること骨にしみて、路を歩くにも上を見し事なく、筋向ふの筆やに子供ずれの聲を聞けば我が事を誹らるゝかと情なく、素知らぬ顔に暖屋の門を過ぎては四邊に人目の隙をうかゝひ、立戻つて駈け入る時の心地、我身限つて腥きものは食べまじと思ひぬ。

父親和尚は何處までもさばけたる人にて、少しは慾深の名にたてども人の風説に耳をかたぶけるやうな小勝にては無く、手の暇あらば熊手の内職もして見やうといふ氣風なれば、霜月の酉には論なく門前の明地に簪の店を開き、御新造に手拭かぶらせて延喜の宜いのをと呼ばせる趣向、はじめは恥かしき事に思ひけれど、軒ならび素人の手業にて莫大の儲けと聞くに、此雑沓の中といひ誰れも思ひ寄らぬ事なれば日暮れよりは目にも立つまじと思案して、壮閑は花屋の

女房に手傳はせ、夜に入りては自身おり立て呼たつるに、慾なれやいつしか恥かしさも失せて、思はず聲高に負けましよと跡を追ふやうになりぬ、人波にもまれて買人も眼の眩みし折なれば、現在後世ねがひに一昨日來りし門前も忘れて、簪三本七十五錢と懸直すれば、五本ついたを三錢ならばと直切つて行く、世はぬば玉の闇の儲は此ほかにも有るべし、信如は斯かる事どもいかにも心ぐるしく、よし檀家の耳には入らずとも近邊の人々が思はく、子供仲間の噂にも龍華寺では簪の店を出して、信さんが母さんの狂氣面して賣つて居たなど言はれもするやと恥かしく、其濃な事は止しにしたが宜う御座りませうと止めし事もありしが、大和尚大笑ひに笑ひすてゝ、默つて居ろ、默つて居ろ、貴様などが知らぬ事だわとて丸々相手にしては呉れず、朝念佛に夕勘定、そろばん手にしてにこ〳〵と遊ばさるゝ顔つきは我親ながら浅ましくして、何故その頭をまろめ給ひしぞと恨めしくもなりぬ。

もとより一腹一對の中に育ちて他人交ぜずの穏かなる家の内なれば、さして此見を陰氣ものに仕立あげる種は無けれども、性來おとなしき上に我が言ふ事の用ひられねば兎角に物のおもしろからず、父が仕業も母の所作も姉の教育も、悉皆あやまりのやうに思はるれど言ふて聞かれぬものゆゑと諦めればうら悲しきやうに情なく、友朋輩は變屈者の意地わると目させども自ら

沈み居る心の底の弱き事、我が蔭口を躍ばかりもいふ者ありと聞けば、立出でゝ喧嘩口論の勇氣もなく、部屋にとぢ籠つて人に面の合はされぬ臆病者極の身なりけるを、學校にての出來ぶりといひ身分がらの卑しからぬにつけても然る弱虫とは知る者なく、龍華寺の藤本は生煮えの餅のやうに眞があつて氣になる奴と憎がるものも有りけらし。

（十）

祭りの夜は田町の姉のもとへ使ひを吩咐られて、更くるまで我家へ歸らざりければ、筆やの驚きは夢にも知らず、翌日になりて丑松文次その外の口よりこれ〳〵であつたと傳へらるゝに、今更ながら長吉の亂暴に驚けども濟みたる事なれば咎めだてするも詮なく、我が名を假りられしばかりつく〴〵迷惑に思はれて、我が爲したる事ならねど人々への氣の毒を身一つに背負たるやうの思ひありき、長吉も少しは我が遣りそこねを恥かしう思ふかして、信如に逢はゞ小言や聞かんと其三四日は姿も見せず、やゝ餘熱のさめたる頃に信さんお前は腹を立つか知らないけれど時の拍子だから堪忍して置いて呉んな、誰れもお前正太が明巢とは知るまいではないか、何も女郎の一疋位相手にして三五郎を擲りたい事もなかつたけれど、萬燈を振込へで見り

やあ唯も踏れない、ほんの附景氣に詰らない事をしてのけた、そりやあ己れが何處までも悪いさ、お前の命令を聞かなかつたは悪からうけれど、今怒られては形なしだ、お前といふ後だてがあるので己らあ大船に乘つたやうだに、見すてられちまつては困るだらうぢやないか、嫌だとつても此組の大將で居てくんねえ、左樣どぢばかりは組まないからとて面目なさゝうに詫られて見ればそれでも私は厭だとも言ひがたく、仕方が無い遣る處までやるさ、弱い者いぢめは此方の恥になるから三五郎や美登利を相手にしても仕方が無い、正太に未社がついたら其時のこと、決して此方から手出しをしてはならないと留めて、さのみは長吉をも叱り飛ばさねど再び喧嘩のなきやうにと祈られぬ。

罪のない子は横町の三五郎なり、思ふさまに擲かれて蹴られて其二三日は立居も苦しく、夕ぐれ毎に父親が空事を五十軒の茶屋が軒まで運ぶにさへ、三公は何うかしたか、ひどく弱つて居るやうだなと見知りの臺屋に咎められしほどなりしが、父親はお辭宜の鐵とて目上の人に頭をあげた事なく廓内の旦那は言はずともの事、大屋樣地主樣いづれの御無理も御尤と受ける實なれば、長吉と喧嘩してこれ〳〵の亂暴に逢ひましたと訴へればとて、それは何うも仕方が無い大屋さんの息子さんではないか、此方に理が有らうが先方が悪かちうが喧嘩の相手に成るとい

ふ事は無い、詫びて來い詫びて來い途方も無い奴だと我子を叱りつけて、長吉がもとへあやまりに遣られる事必定なれば、三五郎は口惜しさを嚙みつぶして七日十日と程をふれば、痛みの場所の癒ると共に其うらめしさも何時しか忘れて、頭の家の赤ん坊が守りをして二錢が駄賃をうれしがり、ねん〳〵よ、おころりよ、と背負ひあるくさま、年はと問へば生意氣ざかりの十六にも成りながら其づう躰を恥かしげにもなく、表町へものこ〳〵と出かけるに、いつも美登利と正太が嬲りものになつて、お前は性根を何處へ置いて來たとからかはれながらも遊びの仲間は外れざりき。

春は櫻の賑ひよりかけて、なき玉菊が燈籠の頃、つゞいて秋の新仁和賀には十分間に車の飛ぶこと此通りのみにて七十五輛と數へしも、二の替りさへいつしか過ぎて、赤蜻蛉田圃に亂るれば横堀に鶉なく頃も近づきぬ、朝夕の秋風身にしみ渡りて上清が店の蚊遣香懷爐灰に座をゆづり、石橋の田村やが粉挽く臼の音さびしく、角海老が時計の響きもそゞろ哀れの音を傳へるやうになれば、四季絶間なき日暮里の火の光りもあれが人を燒く烟かとうら悲しく、茶屋が裏ゆく土手下の細道に落かゝるやうな三味の音を仰いで聞けば、仲之町藝者が呀えたる腕に、君が情の假寐の床にと何ならぬ一ふしあはれも深く、此時節より通ひ初むるは浮かれ浮かるゝ遊客

ならで、身にしみ〳〵と實のあるお方のよし、遊女あがりのさる人が申しき、此ほどの事かゝんもくだ〳〵しや大音寺前にて珍らしき事は盲目按摩の二十ばかりなる娘、かなはぬ戀に不自由なる身を恨みて水の谷の池に入水したるを新らしい事として傳へる位なもの、八百屋の吉五郎に大工の太吉がさつぱりと影を見せぬが何とかせしと問ふに此一件であげられましたと、顔の眞中へ指をさして、何の仔細なく取立てゝ噂をする者もなし、大路を見渡せば罪なき子供の三五人手を引つれて開いらいた開らいた何の花ひらいたと、無心の遊びも自然と靜かにて、廓に通ふ車の音のみ何時に變らず勇ましく聞えぬ。

秋雨しと〳〵と降るかと思へばさつと音して通び來るやうなる淋しき夜、通りすがりの客をば待たぬ店なれば、筆やの妻は宵のほどより表の戸をたてゝ、中に集まりしは例の美登利に正太郎、その外には小さき子供の二三人寄りて細螺はじきの幼げな事して遊ぶほどに、美登利ふと耳を立てゝ、あれ誰れか買物に來たのではないか潜板を踏む足音がするといへば、おや左樣か、己いらは些とも聞かなかつたと正太もちう〳〵たこかいの手を止めて、誰れか仲間が來たのではないかと嬉しがるに、門なる人は此店の前まで來りける足音の聞えしばかりそれよりはふつと絶えて、音も沙汰もなし。

(十二)

正太は潜りを明けて、ばゝあと言ひながら顔を出すに、人は二三軒先の軒下をたどりて、ぱつ〳〵と行く後影、誰れだ誰れだ、おいお這入よと聲をかけて、美登利が足駄を突かけばきに、降る雨を厭はず驅け出さんとせしが、あゝ彼奴だと一言、振かへつて、美登利さん呼んだつても來はしないよ、一件だもの、と自分の頭を丸めて見せぬ。

信さんかえ、と受けて、嫌な坊主つたら無い、屹度筆か何か買ひに來たのだけれど、私たちが居るものだから立聞きをして歸つたのであらう、意地惡の、根性まがりの、ひねつこびれの、吃りの、齒かけの、嫌な奴め、這入つて來たら散々と窘めてやるものを、歸つたは惜しい事をした、どれ下駄をお貸し、一寸見てやる、とて正太に代つて顔を出せば軒の雨だれ前髪に落ちて、おゝ氣味が惡いと首を縮めながら、四五軒先の瓦斯燈の下を大黑傘肩にして少しうつむいて居るらしくとぼ〳〵と歩む信如の後かげ、何時までも、何時までも、何時までも見送るに、美登利さん何うしたの、と正太は怪しがりて背中をつゝきぬ。

何うもしない、と氣の無い返事をして、上へあがつて細螺を數へながら、本當に嫌な小僧とつ

ては無い、表向きに威張つた喧嘩は出來もしないで、温順しさうな顔ばかりして、根性がぐず〳〵して居るのだもの憎らしからうではないか、家の母さんが言ふて居たつけ、がら〳〵して居る者は心が良いのだと、それだからぐず〳〵して居る信さん何かは心が惡いに相違ない、ねえ正太さん左樣であらう、と口を極めて信如の事を惡く言へば、それでも龍華寺はまだ物が解つて居るよ、長吉と來たら彼れははやと、生意氣に大人の口を眞似れば、お廢しよ正太さん、子供の癖にませたやうでをかしい、お前はよつぽど剽輕ものだね、とて美登利は正太の頬をつついて、其眞面目がほはと笑ひこけるに、己らだつても最少し經てば大人になるのだ、浦田屋の旦那のやうに角袖外套か何か着てね、お祖母さんが仕舞つて置く金時計を貰つて、そして指輪もこしらへて、卷煙草を吸つて、穿く物は何が宜からうな、己らは下駄より雪駄が好きだから、三枚襲にして縮珍の鼻緒といふのを穿くよ、似合ふだらうかと言へば、美登利はくす〳〵笑ひながら、背の低い人が角袖外套に雪駄ばき、まあ何んなにか可笑しからう、目藥の瓶が歩くやうであらうと誹すに、馬鹿を言つて居らあ、それまでには己らだつて大きく成るさ、此樣な小ぱけでは居ないと威張るに、それではまだ何時の事だか知れはしない、天井の鼠があれ御覽、と指をさすに、筆やの女房を始めとして座にある者みな笑ひころげぬ。

正太は一人眞面目に成りて、例の目の玉ぐる〳〵とさせながら、美登利さんは戯言にして居るのだね、誰れだつて大人に成らぬ者は無いに、己らの言ふが何故をかしからう、奇麗な嫁さんを貰つて連れて歩くやうに成るのだがなあ、己らは何でも奇麗のが好きだから、煎餅やのお福のやうな痘痕づらや、薪やのお出額のやうなが若し來やうなら、直さま追出して家へは入れて遣らないや、己らは痘痕と芥蠅つかきは大嫌ひと力を入れるに、主人の女は吹出して、それでも正さん能く私が店へ來て下さるの、伯母さんの痘痕は見えぬかえと笑ふに、それでもお前は年寄りだもの、己らの言ふのは嫁さんの事さ、年寄りは何うでも宜いとあるに、それは大失敗だねと筆やの女房おもしろづくに御機嫌を取りぬ。

町内で顔の好いのは花屋のお六さんに、水菓子やの喜いさん、それよりも、それよりもずんと好いはお前の隣に坐つてお出なさるのなれど、正太さんはまあ誰にしやうと極めてあるえ、お六さんの眼つきか、喜いさんの清元か、まあ何れをえ、と問はれて、正太顔を赤くして、何だお六づらや、喜い公、何處が好いものかと釣りらんぷの下を少し居退きて、壁際の方へと尻込みをすれば、それでは美登利さんが好いのであらう、さう極めて御座んすのと圖星をさゝれて、そんな事を知るものか、何だ其樣な事、とくるり後を向いて壁の腰ばりを指でたゝきながら、

廻れ〳〵水車を小音に唱ひ出す、美登利は衆人の細螺を集めて、さあもう一度はじめからと、これは顔をも赤らめざりき。

（十二）

信如が何時も田町へ通ふ時、通らでも事は濟めども言はゞ近道の土手々前に、假初の格子門、のぞけば鞍馬の石燈籠に萩の袖垣まほらしう見えて、緑先に巻きたる簾のさまもなつかしう、中がらすの障子のうちには今様の按察の後室が珠數をつまぐつて、冠つ切りの若紫も立出づるやと思はるゝ、その一構へが大黒屋の寮なり。

昨日も今日も時雨の空に、田町の姉より頼みの長胴着が出來たれば、寸時も早う重ねさせたき親心、御苦勞でも學校まへの一寸の間に持つて行つて呉れまいか、定めて花も待つて居やうはどに、と母親よりの吩咐を、何も厭とは言切られぬ温順しさに、唯はい〳〵と小包みを抱へて、鼠小倉の緒のすがりし朴木歯の下駄ひた〳〵と、信如は雨傘さしかざして出でぬ。

お歯ぐろ溝の角より曲りて、いつも行くなる細道をたどれば、運わるう大黒やの前まで來し時、さつと吹く風大黒傘の上を攫みて、宙へ引あげるかと疑ふばかり烈しく吹けば、これは成らぬ

と力足を踏こたふる途端、さのみに思はざりし前鼻緒のずる〳〵と抜けて、傘よりもこれこそ一の大事に成りぬ。

信如こまりて舌打はすれども、今更何と法のなければ、大黒屋の門に傘を寄せかけ、降る雨を庇に厭ふて鼻緒をつくろふに、常々仕馴れぬお坊さまの、これは如何な事、心ばかりは急れども、何としても巧くはすげる事のならぬ口惜しさ、ぢれて、ぢれて、袂の中から記事文の下書きして置いた大半紙を掴み出し、ばずん〳〵と裂きて紙綯をよるに、意地わるの嵐またもや落し來て、立かけし傘のころ〳〵と轉がり出づるを、いま〳〵しい奴めと腹立たしげにいひて、取留めんと手を伸ばすに、膝へ載せて置きし小包み意氣地もなく落ちて、風呂敷は泥に、我着る物の袂までを汚しぬ。

見るに氣の毒なるは雨の中の傘なし、途中に鼻緒を踏み切りたるばかりは無し、美登利は障子の中ながら硝子ごしに遠く眺めて、あれ誰れか鼻緒を切つた人がある、母さん切れを遣つても宜う御座んすかと尋ねて、針箱の抽斗から友仙縮緬の切れ端をつかみ出し、庭下駄はくも鈍かしきやうに、馳せ出でゝ縁先の洋傘さすより早く、庭石の上を傳ふで急ぎ足に來りぬ。

それと見るより美登利の顔は赤う成りて、どのやうの大事にでも遇ひしやうに、脈の動悸の早

くうつを、人の見るかと背後の見られて、恐る〳〵門の傍へ寄れば、信如もふつと振返りて、これも無言に腋を流るゝ冷汗、眺足になりて逃げ出したき思ひなり。

平常の美登利ならば信如が難儀の體を指さして、あれ〳〵あの意氣地なしと笑ふて笑ふて笑ひ抜いて、言ひたいまゝの悪まれ口、よくもお祭りの夜は正太さんに仇をするとて私たちが遊びの邪魔をさせ、罪も無い三ちやんを擲かせて、お前は高見で采配を振つてお出なされたの、さあ謝罪なさんすか、何とで御座んす、私の事を女郎〻〻と長吉づらに言はせるのもお前の指圖、女郎でも宜いではないか、塵一本お前さんが世話には成らぬ、私には父さんもあり母さんもあり、大黒屋の旦那も姉さんもある、お前のやうな腥のお世話には能うならぬほどに、餘計な女郎呼はり置いて貰ひましよ、言ふ事があらば陰のくす〳〵ならで此處でお言ひなされ、お相手には何時でもなつて見せまする、さあ何とで御座んす、と袂を捉へて捲くしかくる勢ひ、さこそは當り難うもあるべきを、物いはず格子のかげに小隱れて、さりとて立去るでもなしに唯うち〳〵と胸といろかすは常の美登利のさまにては無かりき。

(十二)

此處は大黒屋のと思ふ時より信如は物の恐ろしく、左右を見ずして直あゆみに爲しなれども、生憎の雨、生憎の風、鼻緒をさへに踏切りて、詮なき門下に紙綿を撚る心地、憂き事さま〳〵に何うも堪へられぬ思ひのありしに、飛石の足音は背より冷水をかけられるが如く、顧ねども其人と思ふに、わな〳〵と慄へて顔の色も變るべく、後向きになりて猶も鼻緒に心を盡すと見せながら、半は夢中に此下駄いつまで懸りても穿けるやうには成らんともせざりき。

庭なる美登利はさしのぞいて、えゝ不器用なあんな手つきして何うなるものぞ、紙綿は婆々撚、藁しべなんぞ前壺に抱かせたとて長もちのする事ではない、それ〳〵羽織の裾が地について泥になるは御存じ無いか、あれ傘が轉がる、あれを疊んで立てかけて置けば好いにと一々鈍かしう歯がゆくは思へども、此處に裂れが御座んす、此裂でおすげなされと呼かくる事もせず、これも立壺して降雨袖に詫しきを、厭ひもわへず小懸れて覗ひしが、さりとも知らぬ母の親はるかに聲を懸けて、火のしの火が熾りましたぞえ、此美登利さんは何を遊んで居る、雨の降るに表へ出ての悪戯は成りませぬ、又此間のやうに風引かうぞと呼立てられるに、はい今行きますと大きく言ひて、其聲信如に聞えしを耻かしく、胸はわく〳〵と上氣して、何うでも明けられぬ門の際にさりとも見過しがたき難儀をさま〳〵の思案盡して、格子の間より手に持つ裂れを

物いはず投げ出せば、見ぬやうに見て知らず顔を信如のつくるに、えゝ例の通りの心根と遣る瀬なき思ひを眼に鍾めて、少し涙の恨み顔、何を憎んで其やうに無情そぶりは見せらるゝ、言ひたい事は此方にあるを、餘りな人とこみ上ぐるほど思ひに迫れど、母親の呼聲しば〳〵なるを詫しく、詮方なさに一足二足えゝ何ぞいの未練くさい、思はく耻かしと身をかへして、かた〳〵と飛石を傳ひゆくに、信如は今ぞ淋しう見かへれば紅入り友仙の雨にぬれて紅葉の形のうるはしきが我が足ちかく散ぼひたる、そゝろに床しき思ひはあれども、手に取あぐる事をもせず空しう眺めて愛き思ひあり。

我が不器用をあきらめて、羽織の紐の長きをはづし、結ひつけにくる〳〵と見とむなき間に合せをして、これならばと踏試みるに、歩きにくき事言ふばかりなく、此下駄で田町まで行く事かと今さら難儀は思へども詮方なくて立上る信如、小包みを横に二足ばかり此門をはなるゝにも、友仙の紅葉眼に殘りて、捨てゝ過ぐるにしのび難く心殘りして見返れば、信さん何うした鼻緒を切つたのか、其姿は何だ、見つともないなと不意に聲を懸くる者のあり。

驚いて見かへるに暴れ者の長吉、いま廓内よりの歸りと覺しく、浴衣を重ねし唐桟の着物に柳色の三尺を例の通り腰の先にして、黒八の襟のかゝつた新らしい半天、印の傘をさしかけ高

足駄の爪皮も今朝よりとはしるき漆の色、きは〳〵しう見えて誇らしげなり。

僕は鼻緒を切つて仕舞つて何う爲やうかと思つて居る、本當に弱つて居るのだ、と信如の意氣地なき事を言へば、左樣だらう お前に鼻緒の立ツこは無い、好いや己れの下駄を穿いて行きねえ、此鼻緒は大丈夫だよといふに、それでもお前が困るだらう。何己れは馴れたものだ、斯うやつて斯うすると言ひながら急遽しう七分三分に尻端折て、其樣な結ひつけなんぞより是れが爽快だと下駄を脱ぐに、お前跣足になるのかそれでは氣の毒だと信如困り切るに、好いよ、己れは馴れた事だ信さんなんぞは足の裏が柔かいから跣足で石ころ道は歩けない、さあ此れを穿いてお出、と揃へて出す親切さ、人には疫病神のやうに厭はれながらも毛虫眉毛を動かして優しき詞のもれ出づるぞをかしき。信さんの下駄は己れが提げて行かう、盞處へ抛り込んで置いたら仔細はあるまい、さあ穿き替へてそれをお出しと世話をやき、鼻緒の切れしを片手に提げて、それなら信さん行つてお出、後刻に學校で逢はうぜの約束、信如は田町の姉のもとへ、長吉は我家の方へと行別れるに思ひの留まる紅入の友仙は可憐しき袂を空しく格子門の外にと止めぬ。

(十四)

此年三の酉まであり て中一日はつぶれしかど前後の上天氣に大鳥神社の賑ひすさまじく、此處をかこつけに檢査場の門より亂れ入る若人達の勢ひとては、天柱くだけ地維かくるかと思はる る笑ひ聲のどよめき、仲之町の通りは俄に方角の變りしやうに思はれて、角町京町處々のはね橋より、さつさ押せ〳〵と猪牙がゝつた言葉に人波を分くる群もあり、河岸の小店の百囀りより、優にうづ高き大雛の樓上まで、紗歌の聲のさま〳〵に沸き來るやうな面白さは大方の人おもひ出でゝ忘れぬものに思するもあるべし。正太は此日日がけの集めを休ませ貰ひて、三五郎が大頭の店を見舞ふやら、團子屋の脊高が愛想氣のない汁粉やを音づれて、何うだ儲けがあるかえと言へば、正さんお前好い處へ來た、己れが餡この種なしに成つてもう今からは何を賣らう、直樣煮かけては置いたれど半途お客は斷れない、何うしやうな、と相談を懇けられて、智慧無しの奴め大鍋の周邊にそれッ位無駄がついて居るではないか、それへ湯を廻して砂糖さへ甘くすれば十人前や二十人は浮いて來やう、何處でもみんな左樣するのだお前の店ばかりではない、何此騒ぎの中で良否を言ふ者があらうか、お賣りお賣りと言ひながら先に立つて砂糖の

壺を引寄すれば、隻眼の母親おどろいた顔をして、お前さんは本當に商人に出來て居なさる、恐ろしい智慧者だと賞めるに、何だ此樣な事が智慧者なものか、今横町の潮吹きの處で餡が足りないッて斯う遣つたを見て來たので己れの發明では無い、と言ひ捨てゝ、お前は知らないか美登利さんの居る處を、己れは今朝から探して居るけれど何處へ行つたか筆やへも來ないと言ふ、廓内だらうかなと問へば、むゝ美登利さんはな今の先己れの家の前を通つて揚屋町の刎橋から還入つて行つた、本當に正さん大變だぜ、今日はね、髪を斯ういふ風にこんな島田に結つてと、變てこな手つきして、奇麗だね彼の娘はと鼻を拭つゝ言へば、大巻さんより猶美いや、だけれど彼の子も華魁に成るのでは可哀さうだと下を向いて正太の答ふるに、好いぢやあないか華魁になれば、己れは來年から際物屋に成つてお金をこしらへるがね、それを持つて買ひに行くのだと頓馬を現はすに、酒落くさい事を言つて居らあ爾すればお前は屹度振られるよ。何故々々。何故でも振られる譯があるのだもの、と顔を少し染めて笑ひながら、それぢやあ己れも一廻りして來やうや、又後に來るよと捨蜚辭して門に出で、十六七の頃までは蝶よ花よと育てられ、と怪しきふるへ聲に此頃此處の流行ぶしを言つて、今では勤めが身にしみてと口の内に繰返し、例の雪駄の音高く浮きたつ人の中に交りて小さき身躰は忽ちに隱れつ。

揉まれて出でし廓の角、向ふより番頭新造のお妻と連れ立ちて話しながら來るを見れば、まがひもなき大黒屋の美登利なれども誠に頓馬の言ひつる如く、初々しき大島田結ひ綿のやうに絞りばなしふさ〳〵とかけて、鼈甲のさし込、總つきの花かんざしひらめかし、何時よりは極彩色のたゝ京人形を見るやうに思はれて、正太はあつとも言はず立止まりしまゝ例の如くは抱きつきもせで打謂視るに、彼方は正太さんかとて走り寄り、お妻どんお前買物が有らばもう此處でお別れにしましよ、私は此人と一處に歸ります、左樣ならとて頭を下げるに、あれ美いちやんの現金な、もうお送りは入りませぬとかえ、そんなら私は京町で買物しましよ、とちよこ〳〵走りに長屋の細路へ驅け込むに、正太はじめて美登利の袖を引いて好く似合ふね、いつ結つたの今朝かえ昨日かえ何故はやく見せては呉れなかつた、と恨めしげに甘ゆれば、美登利打萎れて口重く、姉さんの部屋で今朝結つて貰つたの、私は厭で仕樣が無い、とさし俯きて往來を耻ぢぬ。

（十五）

愛く恥かしく、つゝましき事身にあれば人の褒めるは嘲りと聞なされて、島田の鬢のなつかし

さに振かへり見る人たちをば我れを蔑む眼つきと猜られて、正太さん私は自宅へ歸るよと言ふに、何故今日は遊ばないのだらう、お前何か小言を言はれたのか、大卷さんと喧嘩でもしたのではないか、と子供らしい事を問はれて答へは何と顔の赤むばかり、連立ちて團子屋の前を過ぎるに嗔馬は店より聲をかけてお中が宜しう御座いますと仰山の言葉を聞くより美登利は泣きたいやうな顔つきして、正太さん一處に來ては嫌だよと、置去りに一人足を早めぬ。

お酉さま〳〵諸共にと言ひしを道引違へて我が家の方へと美登利の急ぐに、お前一處には來て呉れないのか、何故其方へ歸つて仕舞ふ、あんまりだぜと例の如く甘へてかゝるを振切るやうに物言はず行けば、何の故とも知らねども正太は呆れて追ひすがり袖を留めては怪しがるに、美登利顔のみ打赤めて、何でもない、と言ふ聲理由あり。

寮の門をばくゞり入るに正太かねても遊びに來馴れてさのみ遠慮の家にもあらねば、跡より續いて緣先からそつと上るを、母親見るより、おゝ正太さん宜く來て下さつた、今朝から美登利の機嫌が悪くてみんなあぐねて困つて居ます、遊んでやつて下されと言ふに、正太は大人らしうかしこまりて加減が悪いのですかと眞面目に問ふを、いゝえ、と母親怪しき笑顔をして少し經てば癒りませう、いつでも極りの我まゝ樣、嘸お友達とも喧嘩しませうな、ほんに遇切れぬ

嬢さまではあるとて見かへるに、美登利はいつか小座敷に滿腔搔毟持出でゝ、帶と上着を脫ぎ捨てしばかり、うつ伏し臥して物をも言はず。

正太は恐る〳〵枕もとへ寄つて、美登利さん何うしたの病氣なのか心持が悪いのか全體何うしたの、とさのみは摺寄らず膝に手を置いて心ばかりを惱ますに、美登利は更に答へも無く押ゆる袖にしのび音の涙、まだ結ひこめぬ前髮の毛の濡れて見ゆるを譯ありとは著けれど、子供心に正太は何と慰めの言葉も出でず唯ひたすらに困り入るばかり、全體何が何うしたのだらう、己れはお前に怨られる事はしもしないに、何が其樣なに腹が立つの、と覗き込んで途方にくれば、美登利は眼を拭ふて正太さん私は怒つて居るのではありません。

それなら何うしてと問はれゝば憂き事さま〳〵是れは何うでも話しのほかの包まし去なれば、誰れに打明けいふ筋ならず、物言はずして おのづと頬の赤うなり、さして何とは言はれねども次第々々に心細き思ひ、すべて昨日の美登利の身に覺えなかりし思ひをまうけて物の恥かしさ言ふばかりなく、成る事ならば薄暗き部屋のうちに誰れとて言葉をかけもせず我が顔ながむる者なしに一人氣まゝの朝夕を經たや、さらば此樣の憂き事ありとも人目つゝましからずは斯く迄物は思ふまじ、何時までも何時までも人形と紙雛樣とを相手にして飯事酌りして居たらば嘸

かし嬉しき事ならんを、えゝ厭々、大人に成るは厭な事、何故此やうに年をば取る、もう七月十月、一年も以前へ還りたいにと老人じみた考へをして、正太の此處にあるをも思はれず、物いひかければ悉く蹴ちらして、歸つてお呉れ正太さん、後生だから歸つてお呉れ、お前が居ると私は死んで仕舞ふであらう、物を言はれると頭痛がする、口を利くと眼がまはる、誰れも〳〵私の處へ來ては厭なれば、お前も何卒歸つてと例に似合ぬ愛想づかし、正太は何故とも得ぞ解きがたく、煙のうちにあるやうにてお前は何うしても變てこだよ、其穉な事を言ふ筈は無いに、をかしい人だね、と是れはいさゝか口惜しき思ひに、落ついて言ひながら目には氣弱の涙のうかぶを、何とてそれに心を留くべき歸つてお呉れ、歸つてお呉れ、何時まで此處に居て呉れゝばもうお友達でも何でも無い、厭な正太さんだと憎らしげに言はれて、それならば歸るよ、お邪魔さまで御座いましたとて、風呂場に加減見る母親には挨拶もせず、ふいと立つて正太は庭先よりかけ出しぬ。

(十六)

風一文字に腦けて人中を拔けつ潜りつ、筆屋の店へをどり込めば、三五郎は何時か店をば賣仕

舞ふて、腹掛のかくしへ若干金かをぢやらつかせ、弟妹引つれつゝ好きな物をば何でも買への大兄樣、大愉快の最中へ正太の飛込み來しなるに、やあ正さん今お前をば探して居たのだ、己れは今日は大分の儲けがある、何か奢つて上げやうかと言へば、馬鹿をいへ手前に奢つて貰ふ己れでは無いわ、默つて居ろ生意氣は吐くなと何時になく荒い事を言つて、それどころでは無いとて鬱ぐに、何だ何だ喧嘩かと喰べかけの餡ぱんを懷中に捻ぢ込んで、相手は誰れだ、龍華寺か長吉か、何處で始まつた廓內か鳥居前か、お祭りの時とは違ふぜ、不意でさへ無くば負けはしない、己れが承知だ先棒は振らあ、正さん膽つ玉をしつかりして憑りねえ、と競ひかゝるに、えゝ氣の早い奴め、喧嘩では無い、とて流石に言ひかねて口を噤めば、でもお前が大層らしく飛込んだから己れは一途に喧嘩かと思つた、だけれど正さん今夜はじまらなければもう是れから喧嘩の起りッこは無いね、長吉の野郎片腕がなくなるものと言ふに、何故どうして片腕がなくなるのだ。お前知らずか己れもたつた今うちの父さんが龍華寺の御新造と話して居たを聞いたのだが、信さんはもう近々何處かの坊さん學校へ遣入るのだとさ、衣を着て仕舞へば手が出ねえや、からつきり彼んな袖のべらゝゝした、恐ろしい長い物を捲り上るのだからね、左樣なれば來年から横町も表も殘らずお前の手下だよと煽すに、磨して呉れ二錢貰ふと長吉の

組に成るだらう、お前みたやうのが百人仲間に有つたとて些とも嬉しい事は無い、附きたい方へ何方へでも附きねえ、己れは人は頼まない眞の腕ッこで一度龍華寺と遣りたかつたに、他處へ行かれては仕方が無い、藤本は來年學校を卒業してから行くのだと聞いたが、何うして其樣に早く成つたらう、仕樣のない野郎だと舌打しながら、それは少しも心に留まらねども美登利が素振のくり返されて正太は例の歌も出ず、大路の往來の夥しきさへ心淋しければ賑やかなりとも思はれず、火ともし頃より雛やが店に轉がりて、今日の酉の市めちや〳〵に此處も彼處も怪しき事なりき。

美登利は彼日を始めにして生れかはりしやうの身の振舞、用ある折は廓の姉のもとにこそ通へ、かけても町に遊ぶ事をせず、友遠さびしがりて誘ひにと行けば今に今にと空約束はてし無く、さしもに中よしなりけれど正太とさへに親しまず、いつも耻かしげに顏のみ赧めて筆やの店に手踊の活潑さは再び見るに難くなりける、人は怪しがりて病ひの故かと危ぶむもあれども母親一人ほゝ笑みては、今にお俠の本性は現はれまする、これは中休みと理由ありげに言はれて、知らぬ者には何の事とも思はれず、女らしう温順しう成つたと褒めるもあれば折角の面白い子

を種なしにしたと誹るもあり、表町は俄に火の消えしやう淋しくなりて正太が美音も聞く事稀に、唯夜な〳〵の弓張提燈、あれは日がけの集めとしるく土手を行く影そゝろ寒げに、折ふし供する三五郎の聲のみ何時に變らず滑稽ては聞えぬ。

龍華寺の信如が我が宗の修業の庭に立出づる風説をも美登利は絶えて聞かざりき、有りし意地をば其まゝに封じ込めて、此處しばらくの怪しの現象に我れを我れとも思はれず、唯何事も耻かしうのみありけるに、或る霜の朝水仙の作り花を格子門の外より差入れ置きし者のありけり、誰れの仕業と知るよし無けれど、美登利は何ゆゑとなく懐かしき思ひにて違ひ棚の一輪ざしに入れて寂しく清き姿をめでけるが、聞くともなしに傳へ聞く其明けの日は信如が何がしの學林に袖の色かへぬべき當日なりしとぞ。

11/6/40

一葉全集

畢

Elements of plane ge —

26/VI/35.

一葉全集畢

明治三十年一月六日印刷
明治三十年一月九日發行
明治三十年[illegible]月[illegible]日再版發行
明治三十[illegible]年[illegible]月[illegible]日三版發行

定價金四拾錢

編輯者　大橋又太郎
發行者　大橋新太郎　東京日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　愛敬利世　東京京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　株式會社秀英舍　東京京橋區西紺屋町廿六七番地
發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

版權所有

一葉女史　樋口夏子君著

一葉全集

全壹冊　大判
洋裝　美本
正價四頒拾錢
郵稅八錢

本書に對する江湖の批評

讀一葉全集

文學士　大町桂月

數年前、他より都め花の合本借りて讀みし時、うもれ木をも一讀しけるが、その時はたゞ文章、趣向、よく露伴が學びたる人とのみ感じて、一葉女史といふ名は、早くわが記臆より失せにき。その後、文學界にて大晦日の蓄作をよみ、いたくその落想の奇拔なるに感じたれど、この時は、もはや大晦日の作者と埋水の作者と同一の人なるとだに想ひ起すこと能はざりき。既にしてたけくらべ文學界に出て初めて、未だ完結せざるに際し、ゆく雲太陽にいで、泗江文藝倶樂部にいで、十三夜圓秀小說にいでゝ、女史の名聲藉甚として俄に文壇に重きを爲せり。さるに天年を假さず、われからを絕筆として、一風覓に超たず。嗟然去りて白玉樓中の人となりて、一葉全集永くこの世に才女の形見を殘しぬ。

明治廿五年より明治廿九年まで、僅々四年の間に十八九篇の小說、さかも綺麗の文字あり。女史の精勵既に人に超したるを見るべし。中にてたけくらべ濁江とが尤も優れたることは、既に世評あり、そゝろ貫の中の四篇は、純粹の美文にして、小說にはあらず。之を入れる位ならば、海嘯捨小說に出でたる社鼠も入れるべき筈なり、また女子の傑作の一にして、國民之友春期附錄にいでたる別れ道の、此集に洩れたるも惜しむべき也。

一葉全集の中にて、特に人の注目を惹くは、すべて女子を主人公とせる也。尤もうもれ木の如きは、瀨戸物繪師を主人公とすれども、その妹のお蝶を之と並立せしめたれば、之も女子を描けるものと見て不可なかるべし。次に目立つは、すべて逆境を寫せること也。たとへば、運命、不幸、墮落、かなはぬ戀、怨恨、悲痛の人物事物を材料とせり。またその人物の性格は、熱情にして、意志強く、やさしきが中に、一種凜乎として磨すべからざる氣概あること、各篇を通じて、ほゞ一致せる所なるべし。

その小說の人物の中には、多少自家の俤も現れ居るなるべし。月の夜と題する美文の中に一寸笛聲をほむるにも、『村雲すこし有るもよし、無きもよし』とあり、みがき立てたるやうの月のかげに尺八の音の聞えたる、上手ならばいとをかしかるべし』とて、『村雲少し有るもよし、無きもよし』と記す處、洒脫の氣象も見ゆべく、『上手ならば』と斷ずるなど、案外二方の性質にはあらざるべし。されどまた雨の夜といふ文の結末に、『若

欠

MISSING

と曰へり、『大つごもり』の中には、持つまゝきは放蕩息子、持つまゝきは放蕩を仕立つる繼母ぞかしと曰へり、

女史又頗る才子を憎む、『やみ夜』の中に於いて、才子の君、利口の君萬々歳の世に云々と曰へるが如きは、其の鋒芒を露はしたるの觀あり、

此樣な者ではあれど女房に持たうと云うて下さるも無いでは無けれど、未だ其人をば持ちませぬ、此方で思ふやうなは先樣が嫌なり、來いさいつて下さるお人の氣に入るもなし、嬉とお力が曰へるを女史が聲として聞かんは蓋し非なるべし、然れども『經づくる』の中に、聖樣拂底の世なればにやと云へるは、亦是多少の鋒芒なるべく、『大つごもり』の中に、第一容貌が申分なしだと男は直に是を言ひけり、とあるも女史の言葉なり、全躰に於て、女史が敗者弱者に存分の同情を寄せ、或時は直ちに烈々たる氣焔を吐かしめ、或時は飽くまで拗れて拗れぬかしめ、又或時は案の外に柔しき愛らしき人情の光を現はさしめたるの跡を認む、是れ即ち女史が人生を觀下たる所なるべく、是即ち女史が經歷に數られたる所なるべく、是即ち女史が情緒性癖の範れる所なるべし、

最後に女史の文に就いて一言す、女史の文を以て、直ちに西鶴なりとするは非事なり、西鶴の陋醜なる所は女史が文に上らざるこそ嬉しけれ、而して女史の文には、源氏、枕草紙、つれ〴〵草、の面影少からず、又多く近松の面影を見る、歐文漢文の多少混ぜられたるは固より也、その筆力の遒勁にして而も洒脱なる、その流麗にして而も簡淨なる、古けれども、字々句々金玉の響ありとや謂はまし、

一葉全集と源氏物語

緑亭生

余は一葉女史の如何なる人たりしかを知らず、余は彼れの消息に就いては何物をも知らざる也、而かも余は、彼を能く眉宇の間に歴々として望むを得べし、何に因りてか之を觀る、一葉全集は、克く吾れに消息を語るなり、嗚や『日本に文學滅びざる以上は一葉女史在る』と云ひけん、緑雨氏の言、世を欺かざるの至言といふべし、

一葉全集を讀んで、先づ感ずる所のものは、著者が進歩の痕歴々たるに在り、明治廿五年三月の作闇機より、同廿九年五月の作われからに至るまで、前後二十一稱の名作は、悉く進歩の痕を印したり、余試みに著作の年月を順次に追ふて讀み行きたるに、居一居に進歩し行くが如くに感したりき、

文章は固より推敲の痕見えて、字々金玉なるは、今更らいふまでも無し、只余が彼れの作を讀過し行くの間、心に思ひ寄りたる一ふしを謂はんと欲する也、

女史が明治の紫式部として、自づから任下たるや否やは知らざれども、彼が所作の全集を讀んで余は彼れの紫式部と一機の、觀念保持をしたるの女文學者なる事を發見したり、而かも亦同時に彼れが文中此處彼處に源氏物語より引用し來れる名句あるをも發見したりき、

俗にくだきし河原の院もかくやと許り、夕かほの君ならねども、お勸さまさて、册つかる、娘の兒にも取らで、淋びしき思ひぬか、習慣あやしく無事なる朝夕不思議也……（闇夜）

あくがる、心こゝに堪へがたく、靜かに立つて、妻戸を押せば、今ぞ廿日の月、面かげ霞んで、さし昇ほる庭に、木立のおほろ〳〵き暗らく、似たりや弘徽殿の細殿口、敢て爲めには若くものなき時ぞかし……（曉月夜）

平常の部屋に倚りかゝる文机の湖月抄、こてふの卷の果敢なく燒めて、又思ひそふ一睡の夢、夕日かたぶく窓の簾、風にあをれる音も淋し

……（別れ霜）

源語を引用したりして、穴勝ち夫れが紫式部に似たりとは、斷言し難けれど、彼れが男女の戀情を描寫せるの點に於いて、余は慥に彼れは、多く紫式部に私淑したりと思ふ也、故、如何にといふに、女史が描ける戀愛は、蹇くこれ絶望の戀愛なり、悉くこれ齟齬の戀愛なり、卷ごとに人をして大息せしむるなり、全篇二十一種の小説、悉く是れ絶望の戀愛にあらずや、尤も一二種の取り除けはあれど、戀愛の齟齬は、殆んど其全部を占めたりといふべし、之を源語が吾人に語る戀愛と相較するに、亦も異點あるを見ず、其の能く酷似せるものに至つては、源語の人物を再説し來れるが如きものあり、例へば『やみ夜』のお蘭の如きは、何となく『にごりえ』のお力は、何となく夕顔の境遇に似たる、扨ては『たけくらべ』の美登利は、何となく『濁り江』のけしめはあれと、何れもみな戀愛の齟齬ならざる。源氏を一貫せるものは、戀愛の齟齬なり、一葉全集を一貫せるものは、亦戀愛の齟齬なり若くして良夫を失ひ、既に戀愛絶望の人となりける紫式部に、源語の著あり、妙齢世路の辛酸を嘗めて、寡居戀愛絶望の人となりける、一葉に此の著あり、之を思ひ、彼を思へば、境遇の類似は、作の類似を生ずるものたるを知るべし也、古今人を比較せんに、如き、無謀の企ては語しむべきことなれど、思ひよれるまゝに、斯くは記るせり、

一葉全集

●文學界評　大橋乙羽氏編輯主任となり、齋藤緑雨氏等の傍らより これをたすけて、こゝに樋口氏が生前著作の全集を成すことを得たり。乙羽氏及び發行者は更に綿細なる校訂を得てこれを再版發布せむことを約す、諸氏の故人に對するあつしさいふべきなり。

樋口氏が作品につきては、世既に定評あれば、こゝに敬多の言を費すに及ばず。されどこの集中には未だ世に知られざる三四の小品佳作をも收めたり。且つ一々その製作の年月を與へたれば、次ぎ追ひてその筆路の進みし跡をたづぬるを得べし。うもれ木、曉月夜は才華の爛漫としてまさに開きたるが如く、やみ夜、濁江等に於て、やゝ世を怨みたる如き一種の思想を窺ふことを得べく、大つごもり、十三夜等にて漸くその才の圓熟するを見たり云々。

●國民新聞評　本書は故樋口夏子一葉女史の美文を集輯したるものにて、小説二十、隨筆一、大形にて紙數四百五十八頁、廿五年より廿九年迄五年間の作なり。其文學の至妙なるは言ふ迄もなく、其複雜なる社會を寫すとの眞細なる、如何に女史が眇々の身もて冷刻なる世間を渡り來りたるかも思ひ知られてイトゞ涙の種子ぞかし。今や女史亡しと雖も「日本に文學滅びざる間は一葉女史在る」是れセメてもの慰なるべし。

●中央新聞評　故一葉女史樋口夏子の作を蒐めしなり女史の才藻以て見るべし是れを通讀し往くに女史の才情掬すべく文氣老練なる坐ろに聲名の虛ならざるを覺ゆ女史のため特に本書を出したる博文館の勞は多とせざるを得ず

●都新聞評　一葉女史の小説を集成せしものなり知己あり長編あり濃なるあり淡なるあり而して女子の性情を寫すに於ては特に出色なり此編を讀んで誰も感ずるはかゝる才智爛熟たる女史を失ひし遺憾の情ぞかし

●中京新報評　明治文壇の一天才と識認せられ名聲嘖々として其作驚は僅に髮眉作家を凌駕したる閨秀文學者故樋口一葉女史の遺稿を輯め夫の世評高き「たけくらべ」「濁り江」の二篇を始め二十二篇を載せ彪然たる四百餘頁の大册なり

故若松賤子女史譯述

女子肖像幷ニ松井昇君畫入

小公子

全壹册洋裝
大判頗美本
正價卅五錢
郵稅八錢

近代歐米の讀書社會を震動し劇場に演ぜらるゝこと數十回、一代の流行を左右しめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり純潔無邪氣天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化して、一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめ、行物て甘露慈雨の如し、讀み去り讀み來るうち、讀者自から化せらるゝを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや、

少年固より讀まざる可らず、婦女老人亦讀まざる可らず賤子女史、曩きに其前篇を譯して、世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て

のものとし激賞措かず、冒て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に卷を棄る能はざりしと へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらること切なり。即ち茲に其遺稿を收め、友松井昇氏は密翻を附せり、同好の士希くは一讀を賜へ、

明治年間譯文の最上乘

露國トルストイ伯原著　内田不知庵君譯述

全一册洋裝
紙數二百頁
正價金拾五錢
郵稅六錢

めと

幸田露伴君新作

永洗畫

ひげ男

再版

全一冊洋裝　正價金三拾錢　郵稅六錢

思想文章雙備を以て、今の文豪と許さるゝ露伴子の傑作、着想例に依て天外より落ち、筆々奇警雄拔、讀み來つて無限の趣味あり、御愛讀あらんことを請ふ。

幸田露伴君作　永興口畫

●二宮尊德翁　正價十二錢　郵稅四錢

幸田露伴君作　廣業口畫

●日蓮上人　正價十二錢　郵稅四錢

江見水蔭君著　武內桂舟密畫　四版出來

水雷艇

全一冊大判　正價金廿錢　郵稅金六錢

征清戰中、作家多く筆を收むる間に於て、著者獨り文壇の一方に立り、海陸戰事に關して思を凝で想を餘り、筆力を極めて幾多妙篇を得、是を集めて本書を公けにす、著者が一種の詩眼を備へ、一種の靈腕を有するは世既に定評あり、本書の妙亦贅せずして可ならん、故を以て本書發兌後十日ならずして賣切れとなり、四版亦殆部僅少となれり。

江見水蔭君著　水野年方密畫　三版出來

速射砲

全一冊大判　正價金廿錢　郵稅金六錢

軍事小說『水雷艇』が、出版後十日ならざるに早く賣切れとなりしを見れば、其の傑作たること、多言を俟たずして知るべし、本書は水雷艇の續篇にして、日清海陸戰の事蹟彌々出て彌々奇、篇を追ふに從て益々快に、益々趣あり。幸ひに『水雷艇』と併せて愛讀あらんことを請ふ。

袖珍小說

正價●壹冊金八錢●六冊前金四十五錢●拾二冊前金八拾錢●郵稅一冊二錢

小說の出版日に月に盛んに、我邦文運の隆昌、古來未だ曾て今日の如きはあらず、本館偶ゝ感する所あり、茲に袖珍小說の出版す、本書れ一世の名流巨匠の筆に成り、所謂金聲玉振なるもの、其想は俊邁奇拔、其文は瑰麗雄大、實に文界の偉觀たるに背かず。裝裝亦美術大家の新意匠に成りて、明窓淨几の下、紳士淑女の好伴たるべく船に車に、山に伴ひ、水に伴ひ、旅愁革靴の珍たるべく、又時に世相を觀て文章を習ふ徒をして、精讀沈思精て以て餘師あらしむ。江湖諸君陸續購讀を賜へ。

●第壹編　**つり的**　既刊　正價八錢　郵稅二錢
森田思軒君譯

●第貳編　**間一髪**　既刊　正價八錢　郵稅二錢
幸田露伴君作

●第參編　**僥倖**　既刊　正價八錢　郵稅二錢
櫻庭篁村翁作

●第四編　**彫像師**　正價八錢　郵稅二錢
內田不知庵君譯

●第五編　**三人武士**　正價八錢　郵稅二錢
福地櫻癡翁作

●第六編　**糸瓜の水**　正價八錢　郵稅二錢
天製　幸堂得知翁作

●第七編　**小御門**　正價八錢　郵稅二錢
依田學海翁作

●第八編　**男一正**　正價八錢　郵稅二錢
須藤南翠君作

●第九編　**あま蛙**　正價八錢　郵稅二錢
江戸自慢齋藤綠雨君作

●第拾編　**密告**　正價八錢　郵稅二錢
塚原澁柿園君作

●第拾壹編　**腕だめし**　正價八錢　郵稅二錢
山田美妙君作

●第拾貳編　**杜鵑一聲**　正價八錢　郵稅二錢
遲塚麗水君作

毎月二回發行●第拾參編以下追て廣告す

太陽小説

第壹編

木版極彩色口繪　三島蕉窓　正價金壹拾錢　郵税八錢

目次

取舵　尾崎紅葉
從軍人夫　饗庭篁村
書記官　川上眉山
露のよすが　花園女史
吾妻錦繪　須藤南翠
昭君怨　殿谷小波
新學士　幸田露伴
蘆花合流試　堺枯洲
他人の雲　一葉女史
ゆく水　條野採菊
涙の媒介　宮崎三昧
新袈裟物語

第貳編

木版極彩色口繪　武内桂舟　正價金壹拾五錢　郵税八錢

目次

浮世のさが　小金井きみ子
子煩惱　大橋乙羽
夜の鶴　櫻痴居士
朝顔　江見水蔭
阿新　佐田學海
心中女　幸堂得知
中間閨　嵯峨の屋
浮世新言　廣津柳浪
狂言綺語　渡邊省亭
銀行　滑稽道中双六　南新二

74
56

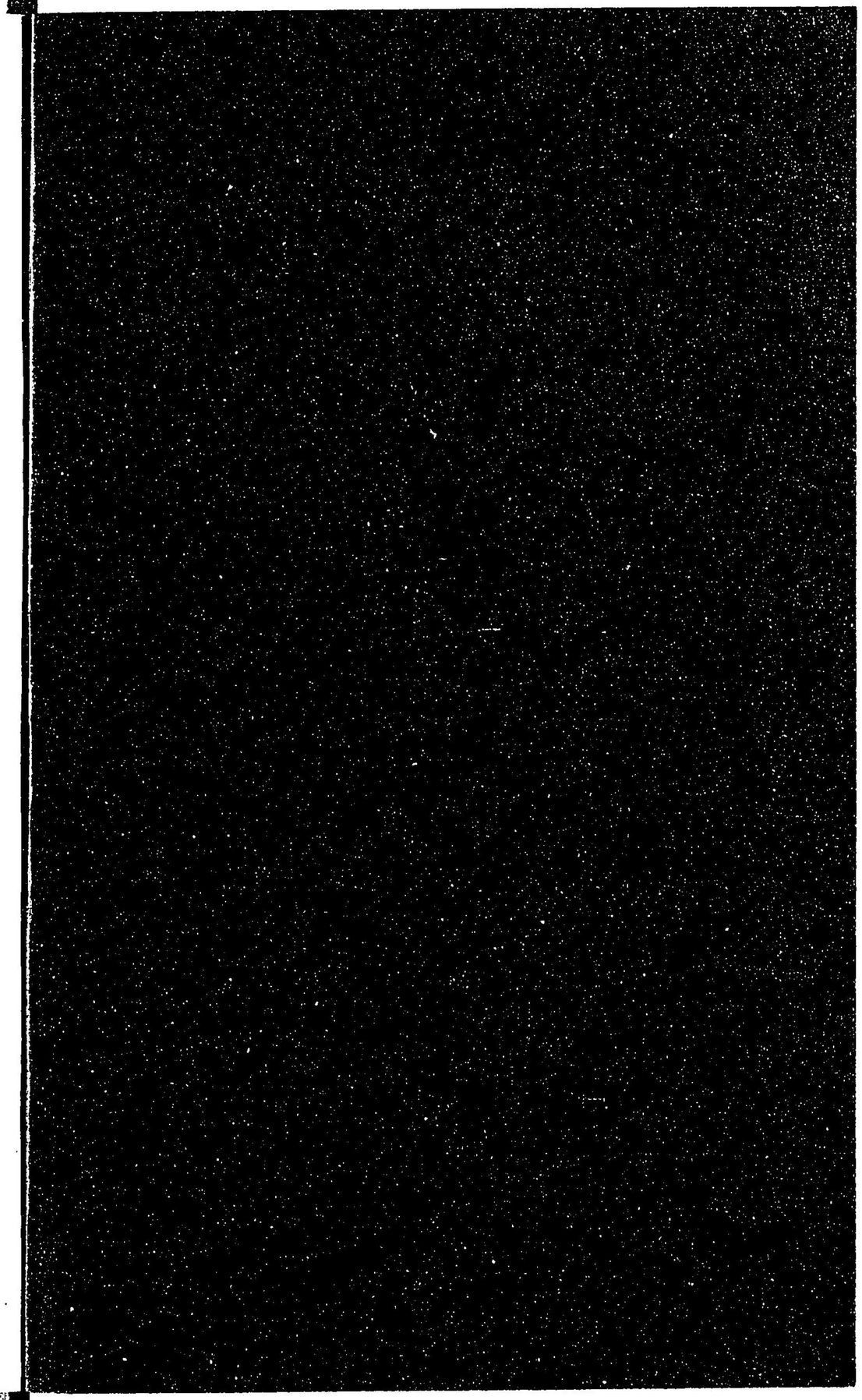
74
56口

084855-000-0

74－56口

一葉全集

樋口　一葉（夏子）／著

M30

DBB-0002